

深思北京

2018年度上級中国語北京研修報告集



東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)
東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

2018年度 上級中国語北京研修——深思北京

北京は何と言っても中国の首都であり、政治の中心です。そして、現代アートに代表される新しい文化発信の中心であり、京劇に代表される伝統文化の中心でもあります。「老北京」と呼ばれる独特の文化が今も残っています。北京はじつにさまざまな顔を持つ重層的な場所です。

この北京の地を舞台に、これまで学んできた中国語の力を試す現場で試す、それがこの上級中国語北京研修——「深思北京」です。「深思北京」と名づけたのは、参加する学生の皆さんに、北京がもつ重層的な姿を体験し、考えてほしいと願うからです。

東京大学では、トライリンガル・プログラム (TLP) を実施していますが、この北京研修は後期課程の TLP と連携した活動として行われました。この研修の運営は、教養教育高度化機構国際連携部門のリベラルアーツ・プログラム (LAP) とグローバルコミュニケーション研究センターの TLP 担当教員が担当し、中国人民大学文学院と北京戯曲評論学会のご協力をいただきました。

北京では、中国に関する講義や学生交流、中国企業や文化施設の見学や関係者との懇談が行われ、「北京」を体験し、中国語の応用力を磨くとともに、中国を重層的に考察する充実した一週間となりました。使用言語は中国語のみとし、日本語は原則禁止にしました。

今年度のプログラムには学部二年 4 名、三年 1 名、四年 5 名の学生が参加しました。

本冊子は、2018 年 11 月 11 日から 18 日の一週間における、東大生の北京見聞録であり、北京という新しき古都に対する思考集でもあります。

2019 年 3 月

目次

スケジュール

1

【思考篇】

中国と「語り」

嶋田泰之

31

活動報告

「食」

大門かおり

36

【深入篇】

「伝統文化」の辿った歴史

―「人」から見える現代史

磯尚太郎

5

中国理解と一帯一路

澁谷宗之介

42

日中の架け橋

浅野宏耀

49

現在の中国における発展について

毛利智香

11

日中文化交流活発化の功罪

小山摩莉子

53

中国文化の「创新性」

宮関貴臣

17

我对中国文化与中日友好的一点思考

小林真也

60

歴史と文化の集積地

野中崇遙

23

執筆者一覧

スケジュール

	午前	午後
11月11日	東京出発	北京到着 北京戯曲評論学会による歓迎会
11月12日	中国人民大学文学院 講義①：口語知識与技能	中国人民大学文学院 講義②：中国古代文学史
11月13日	首都博物館 見学	中国人民大学文学院 講義③：戯劇戯曲学 日中学生交流会
11月14日	人民中国雑誌社 見学・座談会	愛慕集団 見学・座談会 講義④：中国の書道
11月15日	宋敬齡青少年科学技術文化交流センター 体験見学	法海寺 見学 磐古智库 座談会
11月16日	中国对外文化交流協会 座談会	北方昆劇院 北京京劇院 見学・座談会
11月17日	講義⑤北京の歴史と民俗	五里坨民俗館 見学 石景山区政府外事室 座談会
11月18日	自由活動	北京出発・帰国

活動報告

【深入篇】

「伝統文化」の辿った歴史 ——「人」から見える現代史

「中国文化」のイメージ

磯 尚太郎

北京の第二環状線の内側を散歩していると、ごく稀に古い胡同に行き当たると。観光地として全く知られていないけれど、その乱雑で暗い、よそ者を寄せないような路地裏に、ふとこの町の明清以来の歴史を感じてハッとすることがある。故宮を神武門から出て東に歩いていくと、五四大街に辿り着く。その道の名前と、道に沿って建つかつての北京大学紅樓の姿からは、ちょうど一世紀前にこの町で湧き上がった近代化への熱狂が思い出される。南に下って菜市口。無味乾燥な小区のアパートに紛れて、「聖安寺」と書かれた小さな門が建っている。金代に建てられた由緒ある寺院のようだが、聞けば文化大革命の際に貴重な所蔵文化財共々破壊され、今は僅かの建築物を残すのみだそう。再び北に赴き、三里屯。大きなショッピングモールやクラブが点在し、夜になれば様々な国籍の若者たちが集まり町を浮足立たせる。ふと目を見ればそこには政治スローガンが溢れており、「民族復興」とか「共築中国夢」とかいう文字が踊っている。

金代以来各王朝が都した町・北京を旅すれば、数百年のうちはこの国の文化が辿った歴史の痕跡が見て取れる。これらの痕跡から我々が思い描く「中国文明」の流転の物語は何だろう。四〇〇〇年の文明を持つ大国、中国。儒教や科挙制度に代表されるその伝統はしかし、近代に至って攻撃の対象になる。中華人民



このような北京の代表的建築は今ではわずかに残るばかりで、多くは取り壊されてしまった。

共和国建国後は社会主義イデオロギーに沿った国づくりが目指され、悪名高い文革ではあらゆる伝統が断絶の憂き目に。改革開放とともに経済が発展、それとともに文化も大幅に西洋化し、その一方で復古主義的な動きも現れる。近年では「中華民族の偉大な復興」が掲げられ、問題含みのナシヨナリズムが首をもたげている。こんな単線的な物語を、我々の多くは語りたくなるのではないか。

特にこの数十年間の国学ブームや近年の伝統の強調を見て、いわゆる「良心的知識人」の中には薄気味悪さを抱く人も多いだろう。軍国主義と伝統重視が結びついて大きな過ちを犯した記憶を持つ日本の知識人の中には、そうした文化ナシヨナリズムに対して生理的に嫌悪感を抱く人も多い。その感覚は私にも多かれ少なかれあり、現在の中国では「中国の伝統」とか「中華文明」と言った実質の空疎な言葉によって恣意的に集められた伝統が偏狭なナシヨナリズムのために利用されているのではないかという疑念が確かにあった。

中国において「伝統文化」は果たして本当に近代化運動や文革を経て断絶し、近年に至って変質したものが復活させようとされているだけであろうか。丹念にこの町を見、多くの人の話を聞くと、それとは少し違うイメージが浮かび上がって来る。

内面化された伝統知

——靳飛氏と北京戲曲評論学会の人々

北京戲曲評論学会会長・靳飛氏の警咳に接したことがある人なら誰しも、その戯曲や文学、研究作品を批評するときの恐ろしいほどの辛辣さと、自らを慕う弟子たちへの愛情ぶかさを知ってい

るだろう。靳飛氏は京劇や崑劇などの伝統戯曲の研究に携わっており、随筆の執筆や詩詞の創作も手がける。幼少期より様々な文学・芸術に親しみ、早熟にして一〇代で作家活動を始めていたと言うから驚きだ。門下には三〇歳前後の若い学徒たちが多くおり、それぞれ香道、脚本執筆など自らの専門分野で活躍する傍ら、学会を盛り立てている。会員が集まれば自然と演劇、役者、歴史、文学、等に関する議論が始まる。学会は演劇情報の交換、合同での観劇のほか、文化に関する様々な情報を交換しあい、学会やイベントの運営を手がけることもある。

何より特筆すべきなのは、この文化人サークルには師から弟子へ体的に知を受け継いでいく気風が残っている、と言うことである。大学を出ていない靳飛氏は、単なる制度化された知識の伝達を好まないという。もちろん、知識を蔑ろにしていると言うわけではなく、靳飛氏の学術的考証は緻密そのものだ。しかし、授業ではなく食事の席での、あるいは靳飛氏の自宅に会しての議論や、共に多くの劇を観に行くと言う行為、師が思考したり執筆したりする様子を間近に見ることなどは、より身体的な知の交流を会員たちに齎していると言えよう。こうした交流には、かつての中国の文人たちのサークルを彷彿させるものがある。

古典研究の大家である靳飛氏だが、かつて「本当に分かったと思える詩は一〇〇首程度だ」と言っていたことが印象深い。「詩というものは、ただ読むのではなく、感動するまで読まなければいけない」。皮相的な読解ではなく、深層での理解のみに意味を見出していることが分かる。この場所では「伝統文化」が単なるナシヨナリズムを支える記号からは最も遠い所にあることが誰にも分かるだろう。それはいま・ここにあるものとして、個人の中

に確かに脈々と生きていけると言える。

文革と「伝統」

——徐玉良氏の生きた中華人民共和国史

徐玉良氏は書道家だが、その経歴はただの書道家のものではない。徐氏は中華人民共和国の建国以前に河北省で生まれた。父親は共産党員であり、いわゆる「紅二代」だった。建国後、一家は北京へ移住。爾来七〇年近く、北京のまちの変遷を目にしてきたと言う。「当時はまだ北京の城壁が残っていた」と、徐氏は懐かしそうに語る。その後、中国人民大学を卒業した徐氏は政府に奉職。書道を本格的に学び出したのは働き始めてからであるそう。

ずっと北京の歴史を見てきたと言ったが、徐氏は九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、北京に住んでいなかった時期がある。文化大革命期、青年だった徐氏は下放され地方を転々としていたそう。ただし、徐氏の談では、当時農作業に従事するよりは主に工場勤めていて、しかも最初は他の労働者と同じ寮だったが途中からは管理職側になり自分の部屋も持てたと言うから、かなり普通とは違う知識青年時代を過ごしていると言えるだろう。とはいえ、徐氏がその十年間を「素晴らしい思い出」と語り、その時代についてある種の愛着と郷愁をもって回顧しているようであるのを見ると、やはりある種の驚きを覚える人が多いのではないだろうか。文革の時代を文化の断絶として、毛沢東時代の暗黒期としてばかり語りがちな我々にとり、今では書道と言う「伝統文化」に携わっている人が文革期を素晴らしい思い出と捉えていると言うのは想像しにくいからだ。しかし、中国のある層に毛沢東時代へのノスタルジーが存在することは事実だし、徐

氏の中で文革時代の思い出と「伝統」への熱意が矛盾なく共存していることも事実だ。

これに似た意味で驚きを与えてくれたことが、研修中にいくつもあった。例えば、中国医学の専門家で北京の民俗についても詳しい陳飛氏が我々に革命現代京劇の音源を聴かせてくれたながら語ってくれたことは興味深かった。陳氏はそれがとても面白いものであり、改革開放後の京劇の形式に大きな影響を与えたものであると説明してくれた。抑圧され、権力により規定されていたと思われる文革新期の演芸が、後世に少なからぬ影響を与え、面白いものとして今なお享受されているというのは、文革による文化断絶史観を相対化するのに十分なものだ。また、次章で紹介する王衆一氏の映画体験も興味深い。日本映画の研究者でもある王氏が初めて日本映画に触れたのは、他でもない文革中だったという。その時みた映画を覚えていた王氏は、改革開放の後にたくさ



快板も中国の伝統芸能を語るに欠かせない文化の一つである



人民公社時代＝毛沢東時代へのノスタルジーを演出したレストラン

ラン

ん輸入された日本映画を観るようになったと語ってくれた。文革中の芸術体験が元になって一人の映画研究者が生まれたという事実は注目に値するだろう。当事者たちがその時代をどのように生き、どのように捉えているのかに注目する視座を持てば、最初に述べたような単線的な物語は、相対化されなければならないことが分かる。

「中国の物語を語る」ということ

——王衆一氏との対話を通して

日本語で中国を紹介する雑誌『人民中国』の編集長である王衆一氏は、東京大学への留学経験もある屈指の知日派中国人である。前述したように日本映画の研究者でもあり、映画に関する数々の日本語書籍の翻訳がある王氏は、中国国内に向けて日本文化を紹介することも盛んに行っている。

初めて雑誌『人民中国』を読んだ時、その紙面の親しみやすさと多様さに少なからず驚いたのを覚えている。中国政府機関の発行する外国向けの雑誌であれば、きつとプロパガンダや通り一遍の公式の見解しか書かれていないのではないかと、と言う勝手な偏見が心の何処かにあったからだ。しかし、実際にはその内容は政治ニュースの他に、地方の紹介、流行りの大衆文化の紹介から、俳句の漢俳、漢詩訳など文芸的記事まで多岐にわたっている。その中にはやはり、「伝統文化」に関連する記述も多くある。

「文化」を記述し、紹介すると言う作業は、本来とても難しい作業であるはずだ。「文化」がかつてない熱を帯びて議論された「ニューアカ・ブーム」の余燼燼る一九九〇年代の東大駒場で学び、事実蓮實重彦の研究から大きな影響を受けたとも語る王氏は、そ



中国外文出版发行事业局。この中に『人民中国』のオフィスもある。

それを明確に意識していることだろう。ことに書く内容が「政府の立場」により一定の規定を受けざるを得ないとあれば尚更だ。「文化」を記述し、紹介すると言う行為に伴ういわゆる（自己）オリエンタリズムの問題について問うと、王氏は「だからと言って発信をやめることはできない。中国はまだオリエンタリズムを云々する段階にはない。まずはきちんと自分を物語ることをしないと」と言う答えだった。その上で、二つの言語のコンテキストを自在に往来することができなければ、文化を翻訳したり紹介したりすることはできない、と言う。そして、「日本という国について深く知れば知るほど、中国人としてのより明確な自己認識に近づく」とも語ってくれた。政府公式雑誌の編集長と言う立場ではあるが、王氏は排他的なナショナリズムのための文化宣伝者からは最も遠いように見える。そこにあるのは2つの言葉・文化の間を絶えず来往し、記述の困難を超えて自己の文化を書き続ける中で同時に自己への認識を新たにしていくな個人の間ではあるか。

終わりに

中国の「伝統文化」が辿った歴史は、最初に記したような単線的な経過を辿って断絶したり復古されたりしたという物語とはかなり違うということが、この短い一週間の研修で出会った人の話からも分かる。もちろん、この数十年で中国の文化が確実に巨大な変化を来したことは事実だろう。また「伝統文化」が記号として権力に利用される危険性を過小評価するべきではないのも無論のことだ。しかし、その歴史に回収されない現象が存在していることもまた事実である。

文化は人が担うものである。文化によって人の思考がある程度

規定されることはいままでもないが、「文化」という実体が存在して自律的な生を送っているのではなく、それを享受し、創り出し、伝える人がいるからこそ存在しうることもまた明らかだ。だから、大文字の歴史や権力の側の言説とは別のところで、それに回収されない、文化を担う生身の人間のレベルにおいて文化をとらえかえすことが重要だろう。そしてそれは、最初に書いたように北京を旅して目に映ったものに自らの知っている知識を投影しているだけでは決してできない。様々な人の語りを聞いて考える必要がある。文化を担う人に触れることで初めて、複雑な文化の一部がようやく垣間見えるのかもしれない。

北京の横顔

1年間北京に留学した経験がある私にとって、北京は様々な個人的な記憶の詰まった都市である。再び北京に降り立ち、このまちがいつも通りせわしなく動いているのを見たときは、4ヶ月前にここを離れたばかりなのに、置いてきぼりをくらった時のようなことなく寂しい気持ちにしたものだ。今回の研修中も少ない自由時間を使って、かつて暮らした北京大学に行って友人に会ったり、留学中よく行っていた場所を訪れたりした。11月、木の葉が黄色に色づく時期は北京の一番いい季節だ。空気さえきれいな日であれば、ではあるが。

北京は政治の都市でありまた歴史・文化の都市であるが、学生としての普段の生活の中でそれを感じることは決して多くない。もちろん、北京大学の周囲にも頤和園や円明園など歴史を感じさせる遺跡はたくさんあるし、北京はさすがに政治イベントが多ければ学生への政治的抑圧・管理も厳しいので、意識する機会はたくさんある。しかし、中国の学生の生活は広いキャンパスの中で完結してしまうことが多く、外の世界に目を向けなくても暮らしていけてしまう。実際に北京大学には政治に関心のある学生も少なくないが、一方で全く無関心な「ノンポリ」も多い。

今回の研修では、1年間の北京生活で全く接する機会を得なかった人にも沢山出会えた。譚鑫培の後裔という、佇まいからして武生の威風を備えたきつぷの良い女性京劇俳優。一带一路や日中関係について熱のこもった口調で明晰に語る盤古智庫の易鵬氏。自由の風を颯爽と吹かしながら、先端的な技術を用いて環境を変える企業を立ち上げた経験を語る、おしゃれで洗練された白雲峰氏。落ち着いた口調と格調高い言葉で質問に答える中国対外文化交流協会の時堅東氏。北京には実に色々な人がいて、我々の知らないところで色々な事業が行われている。同じまちで生きていても、様々な世界があり、様々な生き方があり、様々な価値観があるという、大学という同質性の高い空間からは見えてこないことを再認識した1週間だった。

北京は広い。私はまだ2000万人の人が暮らすこの都市の、ほんの片鱗に触れたに過ぎない。次にこのまちを訪れる時には、このまちは一体どんな人に私を会わせ、どんな横顔を見せてくれるのだろうか。

(磯尚太郎)

現在の中国における発展について

毛利 智香

中国に対するイメージはどのようなものか。私はまず、発展した大国というイメージを思い浮かべる。中国は自身のことをよく発展途上国というが、ファーウェイなどの先進的な企業が活躍し、アメリカと貿易戦争を起こすまでに経済規模の大きい国は、アフリカ諸国などのいわゆる発展途上国といったイメージとまるで合わない。

では、発展した大国と言っても、発展するとはどういうことなのだろうか。今まで私は、技術が進化し経済的に豊かになることが発展だと考えており、その意味で中国を発展した大国と認識していた。しかし今回の深思北京では、このような私の認識とは異なった、発展した中国の新たな一面を見せられた。

一三日に見学した首都博物館は、地上五階、地下二階建ての非常に大きな博物館である。日本の博物館では絶対にありえないサイズ感だと圧倒されていたら人民大学の学生に笑われてしまったほどだ。遼の時代の文物、京劇の小道具、中華民国時代の庶民の生活用品など、フロアごとに様々な時代の展示があり、非常に興味深かった。学校の遠足で見学に来ていた小学生、中学生も多く見られ、中国の博物館は日本よりも人気があるような印象を受けたが、実際、現在中国は、文化を重視する風潮にあるという。歴史研究においても従来は政治的、軍事的に強い国家であった唐を

重視していたが、最近では文化的に成熟していた宋を再評価する傾向にあるらしい。また、昨年は、国内の有名な博物館に所蔵されているものの中でも最高のものを紹介する番組《国家宝藏》が大ヒットしたという。この番組の影響もあつてか、現在中国では博物館ブームが起きているという。



研修二日目に人民大学の学生と共に訪れた首都博物館。地上5階、地下2階建て。非常に大きく、日本では考えられない博物館の大きさに圧倒された。また、たくさんの小学生、中学生が見学に来ていた。

一四日に訪れた愛慕公司是、中国でシェアのほとんどを占める女性用下着会社である。研修前の講義で愛慕公司に行くとき聞いた時、正直なところ意外であった。下着はITなど現在世界的に注目されているような分野ではないので、政治的中心である北京を考察する今回の研修で中国の代表的な民間企業として愛慕公司を見学することが不思議だったのである。実際に訪れてみると、スポーツ用品専門ブランドと遜色ないようなスポーツウェア、機能性・装飾性に優れた下着、子供の肌を考えて生地工夫のされたベビーウェア、女子児童の発育に考慮した子供用下着などの展示がされており、中国ではないようなスタイリッシュな雰囲気であった。また、家具のブランドも展開しており、ここでは華麗な刺繍が施されたシルク製のクッションなどの家具が展示されていた。伝統的な中国の美がテーマとなっており、皇帝の居室を思わせるような展示に圧倒された。また、愛慕が所有する美術館には、下着を用いた美術品や下着をモチーフとした芸術品があり、思わず「美しい」と息を飲んでしまうほどであった。愛慕で働く方によると、社員食堂にも気を配っており、栄養に気を使ったシェフ手作りの食事を朝から提供しているらしい。また、公益活動にも力を入れており、乳がん患者の支援活動や貧しい家庭の子供の教育支援活動なども行なっているという。このようなことをしている企業は日本でも珍しいのではないだろうか。私にとって中国の成功している企業とは、技術を革新し、無駄を省き利益を追求しているイメージだったが、社員のことを考慮したり社会責任を果たしたりするなど、日本でも実現できている企業は少ないであろうようなことをできているこの企業は明らかに成功している。



愛慕家具の展示。中国の伝統的な家具を現代風にアレンジしており、魅力的だった。



全民暢読書店の店内。従来の書店のイメージを大きく覆すような、開放的でおしゃれな空間の使い方になっている。

一七日に訪れた全民暢読書店は、日本の蔦屋書店にも影響を受けたらしく、普通の本屋とは本の配置や店の設計が一風違っていた。コンクリート建てで現代的でありながら、中国風の瓦も残る、おしゃれな空間となっていた。また、カフェやジムなども併設されており、ただ本を売るだけではなく本のあるライフスタイルを提供していた。この書店が位置する楊庄大街は、かつて骨董品の店が集まる場所として栄えていたらしい。最近リノベーションが行われており、美術大学出身の若者がおしゃれな店を多く経営している。現在東京の蔵前などでも、下町の古い建物をリノベーションして若者向けのカフェなどを出店することが流

行っている。全民暢読書店を訪れた時、私は日本のこのような土地と似ているという印象を受けた。

また、この楊庄大街は石景山区の一部であるが、その前日に訪れた法海寺付近のエリアも石景山に位置していると言う。そのエリアは古い建物が立ち並び家の外にはトウモロコシが干してあり、いかにも老北京といった雰囲気であったが、少し汚い印象を受けた。法海寺も高所に位置しており、観光業として成功させるためにはもう少し整備する必要があるように感じられた。もちろん、昔ながらの景観を求めて観光客は訪れるので、現状の景観を全部壊して開発するようなことがあつてはならないので、老北京の雰囲気壊さない程度にどう開発するかが問題であろう。このように、石景山の開発の段階は場所によって差があるらしいが、この一帯は政府よつての開発が進められている。ここで政府による開発の内容についても述べておく。

石景山区は、北京の西部の長安街沿いの、天安門広場から一四キロメートル離れたところに位置している。近年、「包括的で完全なモデルチェンジ、ハイエンドな緑化開発」戦略に基づき、現代的な金融、高度な技術、文化的な創造性、ビジネスサービス、レジャー観光などの分野に支えられて、石景山区は先進的な経済区域を創設しており、ハイエンドで環境にも優しい地域を作るために、「二つの軸、三つの地区、多数の核」を特に重視している。この計画が成功すれば、石景山区は自然が美しく、文化的にも優れ、市民が住みやすい区域となり、都市開発のモデルケースとなるであろう。

現在の石景山区の状況について説明しておく。自然環境面につ

いては、石景山区は、山地面積が全体の二三パーセントを占め、緑地面積は五一・三パーセントに及び、一人当たりの緑地面積は一八・四平方メートルである。永定川が流れ、首都北京にありながら自然を楽しめる場所となっている。文化面では、石景山区には七二の歴史的文化的遺産があり、八大処、法海寺、天泰山、田義墓、模式口駝鈴古道などが有名である。八大処灵光寺に保管されている佛牙舍利は、世界で二つしかない釈迦牟尼の佛牙舍利のうちの一つである。また、法海寺には明代の宮廷壁画が保管されている。インフラ面では、水、電気、ガスなどは継続して向上しており、また、道路、鉄道も新たに建設中である。産業構造の最適化も進んでおり、二〇一六年のこの地区のGDPは四六〇億元であり、このうちサービス業が占める割合は八五・六パーセントだった。また、環境保護のために床面積五〇〇平方メートルを超える公共建築物には绿色建筑三星標準という基準をクリアすることを求めているが、それと同時に多くの企業を誘致しやすい場所の創設にも尽力している。首鋼グループの製鉄業の調整により、新たに開発する場所が増えた。ここに冬季オリンピック委員会などをおくことでこの地のグローバル化を進めている。

以上のような深恩北京での経験により、私は中国における発展に関して、三つの新たな視座を得た。一つ目は、中国の美しい伝統文化を世界に発信していくという意味での発展ということ。これは習近平がトランプを京劇でもてなしたことから分かるかもしれないが、ここで重要なのは、このような動きが政府だけにやるものではないということだ。博物館ブームからも分かるように、政府は国民の文化への関心を高めることに成功している。政府だけが自国の文化の宣伝に必死で、国民が文化に全く関心がないと

するならば、文化を発信する活動はうわべだけのもので意味がない。外国の人が中国の文化を美しいと思うにはまず自国の国民が自国の文化を理解することが必要だ。ある国が経済成長によって世界を圧倒することももちろん発展であるが、多くの外国人が中国の文化に惹かれるようになることも発展であろう。二つ目は、事業を拡大するとき、新規事業を立ち上げるとき、多くの人が注目しないようなことをテーマにすることだ。このような動きは、愛慕の「創造美 传递爱」をモットーにした中国風の高級家具を売る分野、女子児童の健全な発育に考慮した子供用下着の分野への事業展開や社会公益活動、それから全民暢読書店の、本のあるスタイリッシュな空間、それでいて中国の伝統も織り交ぜたような空間の提供の中に見ることができる。近年ではIT関連のベンチャー企業が多く、お金を儲けるならIT分野、というように多くの人がIT化に躍起になっているように思われるが、ITだけで発展していく社会はつまらないではないだろうか。愛慕や全民暢読書店はITとはかけ離れているかもしれないが、このような企業の成功も、発展と言えないだろうか。三つ目は、中国は日本も達成できていないような分野での挑戦を始めているという事。中国が経済発展するときには、完成像が日本などの先進国に求められることが多かったと思われる。しかし、石景山区の開発では、日本に答えを求めるとはできない。もちろん日本にも都市開発はあるが、すでに都市開発における成功の方程式が見つかったと言えるような状態にはない。もし石景山区の開発が完成したら、日本も見ることがないような新しい都市の形を見ることができらるだろう。

このように、現在の中国における発展は、私が以前持っていたような認識とは異なり、経済発展やIT化に邁進することだけではなかった。また、現在中国が行なっている発展には、日本もまだ達成できていないような分野も多くあった。このような発展を経て、中国はどのような大国になるのだろうか。非常に楽しみである。

中国らしさ

この研修で、様々な角度から「中国らしさ」に触れることができたと感じているが、ここでは飲食という観点から中国らしさについて述べようと思う。

ほとんどの昼食と夕食を中国の目上の方と一緒にとったため、回転式のテーブルで中国風のもてなしを受けた。目上の方との食事であったため、マナーに気をつけよとの指示があったが、日本での目上の方との食事の場よりも堅苦しくないような印象を受けた。回転式テーブルにのせられた大皿の料理を各自が好きなように取り分ける、といった様式のためであろうか。また、研修中に会う方々はたくさん話してくださった。食事の席は円卓であるため、同じテーブルの人全員に話を伝えようとなると、円の直径ほどの距離まで離れたところに人に届くような声で話をする必要がある。そのためであろうか、食事の際のお話であっても演説のような雰囲気であった。確かにこのような雰囲気は日本とは違うが、私はこのような中国らしさが好きになった。(将来中国に関係するような仕事をしたいと思っている私にとって良いことだと思っている。) 研修中に食事の席で隣になった人が、中国の人は皆明るい性格だと教えてくれた。このような国民性が食事の場にも表れているのではないだろうか。

今回の研修では、中国茶の文化にも触れることができた。以前から中国の文化が好きだったが、中国らしいイメージが好きだけで詳しいことはあまり知らなかったため、ありがたい機会であった。中国茶の淹れ方は、日本の茶道とはまるで違う。茶葉の入った湯飲みにお湯を注ぎ、茶葉が出てこないように蓋を斜めにおいて客人用の小さなコップに注いでいく。コップも日本のものとは違い小さくて繊細なものであり、お茶の入れ方も洗練された印象を受けた。しかし、中国茶の歴史は長すぎて古代から伝わった作法というものがなく、現在の淹れ方は茶館で庶民がお茶を楽しんだ時の作法がもとになっているらしい。確かに日本の茶道のように何度もお辞儀をする、といった難しい作法はなかった。

作法がありながらも、それに縛られないというのが(少なくとも飲食における)中国らしさなのかもしれない。もちろん中国を担う人とお話をする中でシビアなことも経験したが、それとバランスをとるような形で、飲食という面でおおらかな中国らしさがあったのかもしれない。

(毛利智香)

中国文化の「創新性」

宮闕 貴臣

二〇一七年に開かれた中国共産党第十九次全国代表大会において、文化に関わる政策方針として「传统文化の創造性の転化と創新性の発展を推し進める」ということが提唱された。このことからわかるように、中国では、传统文化は絶えず創り上げられていくものである、という「創新性」の概念が存在する。今回の北京研修では中国の传统文化に触れる機会が豊富にあったが、その際にもこのような中国の「創新性」を意識させられることはままあった。この中国文化の「創新性」について意識しながら、今回の研修中の中国文化に関する自分自身の発見を記していきたい。

「中国文化」と聞いて最初に連想するものは人によって大きく異なるであろうが、自分にとってのそれは中国茶である。個人的に中国茶が好きで、日常的に飲用しているため、中国茶は自分にとっては最も身近な「中国文化」の一つといえる。今回の研修中も、日々の食事の際は当然として、中国茶に触れる機会は多数あった。初日の自由時間では「馬連道」という茶市場に立ち寄ることができたが、この「馬連道」には中国各地からお茶が集められており、巨大なビルの中に何軒ものお茶屋が軒を連ねて茶葉や茶器を販売していた。日本でも茶文化は根強いが、緑茶が中心で産地も限られている日本に対し、中国では数千種類ともいわれる多種多様な茶が国内各地で生産されており、それらが一大消費地であ



初日に訪れた馬連道茶城。写真からもその大きさが伺える。

る北京に向けて出荷されるため、このような巨大な茶市場が形成されているのであろう。茶文化の大本だけあって、日本とは比べ物にならないほどのスケールの大きさが感じられた。

研修では北京の歴史についての講義も受けたが、ここでは北京と茶とのつながりについて学ぶことができた。古くから政治の中心であった北京には、伝統的に、皇帝の文化としての「皇城文化」と、商人らによる平民文化が共存していた。「皇城文化」は城壁の内側で栄えたのに対して、商人ら平民は城壁の外側にしか居住できなかったため、「外城」では平民文化が根付き、商業区域が形成された。それに伴って娯楽施設なども形成されたが、庶民の憩いの場としての茶館もその一つであった。茶館ではもちろん茶がふるまわれていたわけだが、実際には茶を飲むことが必ずしも主要な目的ではなかった。茶館に訪れるのは主に比較的裕福な有閑階級で、そこでは寄席芸能の一種である「評書」が行われたりするなど、独特の茶館文化が形成されていたのである。また、北京の人はジャスミン茶をよく飲むようであるが、北京は昔から水質があまり良い場所ではなかったため、質の悪い水でも美味しく飲むことができるジャスミン茶を飲む習慣が根付いたとのことだ。

加えて、「宋慶齡青少年科学技術文化交流センター」という、青少年向けに中国文化を紹介する施設を訪問した際にも、専門講師による中国茶についての概説を聞くことができた。中国茶は紀元前から存在したと言われ、悠久の歴史を誇る伝統文化であるが、その中には新たな要素も多数存在する。例えば、中国茶には「六大茶類」という分類があり、これらは発酵度合いや製法の違いに

よって緑・白・黄・青・紅・黒というように色で分けられているが、この分類は実は改革開放期に作られたものであり、それ以前は存在しなかった。しかしながら、現在では六大茶類はすっかり定着し、中国茶文化の「伝統」の一部となっている。このように、



宋慶齡青少年科学技術文化交流センターで中国茶についての講義を受ける様子。

生活に身近な存在である中国茶からも、古くからの歴史を背景としつつ新たな伝統が絶えず創られていく様を感じ取ることができるのは非常に興味深い。

茶文化との関連で、食文化についても一言添えておきたい。中華料理と言えば円卓を囲んで大人数で食事をする、というイメージはすぐに湧くと思うが、その内実は奥深く、各地方に特色がある。今回の研修では、四川・山東・東北・ウイグルなどの郷土料理を食べる機会があったが、味付けや食材など、とても同じ中華料理としてひとまとめにすることはできないほどバリエーションは豊富であった。また、テーブルマナーも独特である。目上の人を敬うテーブルマナーというのは日本でもなじみ深いですが、中国では「建て前」と「実際に行うべきこと」が暗黙の了解として深く浸透しているように感じた。例えば、いくら先に食べてよい、と言われても、一番目上の人が箸をつけるまでは先に食べてはいけない、などである。このような決まり事に慣れるまでは戸惑う部分もあったが、食事という最も基本的な部分で中国文化を体感することができたのはよかった。

中国の民俗文化について触れる機会もあった。「五里坨民俗館」は「老北京」の街並みを忠実に再現した民俗館で、北京の伝統的な風俗を参観者に伝える施設となっている。衣類や工具、玩具などの生活用品の展示や、各年代ごとの生活空間の様子を再現したブースなどに加えて、祭囃子のような踊りの実演などもあり、伝統的な民俗文化に実際に触れる貴重な体験ができた。それに加えて、研修中に実際に「老北京」と呼ばれる場所を散策することもできたが、「老北京」の街並み・雰囲気は変わらないものとして残っ

ているものの、新築とみられるような建物ができていたり、さらには無人自動図書館が設置されていたりと、街の内部では新陳代謝が行われているさまを感じ取られた。このように、「変わらないもの」と「変わっていくもの」が共存しつつ、伝統の継承と刷新とが同時並行で行われているのは中国に限った話ではないと思うが、中国はとりわけ、新しいものへの受容性が高いように感じる。例えば都市部では、電子決済の普及、大量のシェアサイクル、タクシーや配送アプリの発達など、新技術が日本以上に目まぐるしい速度で取り入れられている。この要因の一つとして、「いいものは取り入れ、悪いものは伝統といえども捨てることを厭わない」とする中国の合理主義的な気風があるのではないかと個人的には思う。



五里坨民俗館で民俗的な踊りを鑑賞した。



再現された老北京の街並み。

また、今回の研修のテーマの一つである戯曲文化も中国文化を語る上では外せない。研修では、「北方昆曲劇院」による昆曲の「牡丹亭」の演目を鑑賞することができた。中国の戯曲を鑑賞したことがなく、「霸王別姫」という映画でその存在を知っている程度であった自分にとって、役者の迫力に満ちた演技は圧巻であった。それに続けて、北京京劇院では実際に京劇・昆曲の劇団員の方々とお話しする機会を得ることができた。京劇はその長い歴史の中で、梅蘭芳による近代化など絶えず改変を経ており、本質的に「包容性」が高いものである。現在でも、これまでには存在しなかったような小劇場であったり、テレビドラマの題材をヒントにして作品を作るなど、新たな要素が取り入れられ続けている、ということを知ることができた。確かに、昆曲を鑑賞した際にも電光掲示板による字幕が付けられていることに気付いたが、このような舞台装置の工夫も戯曲の新たな要素といえるであろう。京劇と言えば、梅蘭芳のように、男性が女性役を演じる「男旦」が有名であるが、この「男旦」が生まれた背景としては、以前は女性の社会的地位が低かったため京劇に出演できるのは男性のみであった、ということがある。現在では「男旦」はほとんどいないということを知っていて意外な思いがしたが、伝統といえども時代に応じた改変を厭わない中国文化らしいとも言えるだろう。

文化の伝達・発展においてメディアが果たす役割は非常に大きい。研修中に訪問した「人民中国」雑誌社は、日本向けの中国宣伝雑誌社として、半世紀以上にわたって中国文化を日本語で発信してきたが、絶えず新たな取り組みが試みられている。ネットの普及以降、速報性を確保するために、日本現地での企画・印刷体

制が確立された。また、異文化交流の試みとして、中国事情の俳句での紹介や、逆に日本のサラリーマン川柳を五・七・五の中国語に翻訳しての紹介など、雑誌の内容にも創意工夫が凝らされている。とりわけ個人的に興味を引いたのが、二次元的なキャラクターを用いて中国の少数民族の文化を紹介するというコーナーで、このような試みは二次元表象になじみが深い日本の若者にとって中国の少数民族に興味を持つとてもよいきっかけとなるだろうと思う。王衆一編集長のお話の中で特に深く印象に残っているのは、日中の体制の違いを前提としたうえで相互理解の促進が重要であり、そのために、例えば災害支援などコンセンサスを得やすい部分から日中の協力関係を盛り上げる雰囲気づくりをしていくことができればよい、ということである。単に中国政府のプロパガンダを目的とするのではなく、真の日中友好を達成するために日本人読者に「中国」について知ってもらうにはどうすればよいか、ということ懸念に模索しているのだと感じた。日本のメディアはどちらかというと政治問題などの中国の負の側面を取り上げがちであり、中国に訪れたこともないために、そのようなメディアの影響を受けて中国に対するマイナスのイメージを抱いてしまふ人が少なからずいるように感じる。もちろん中国に対してどのようなイメージを持つかは個人の自由だが、隣国である中国を知ろうとする姿勢が誰にとっても大切であることは疑いないであろう。そのうえでメディアがどのような情報を提供するかが非常に重要となり、そのことを王編集長も意識しているのだと思われる。

以上のように、今回の研修では様々な分野において中国文化に関する新たな発見を得ることができた。日本においては、伝統文

化は保存されるべきものであり、そこに改変の入り込む余地は少ない、という価値観が強く存在すると個人的には感じるが、中国文化においては対照的に、伝統といえども「創新」することが可能である、と捉えられていることを身をもって実感した。伝統文化というものを考える際について過去の歴史に目を向けてしまいがちであるが、文化は過去の遺物ではなく、今を生きる生き物である。中国文化を考えるにあたってはこのような視座はとりわけ重要となるだろう。

「中国」理解についての内省

「深思北京」に参加して何よりも痛感したことは、自らのこれまでの中国への理解がいかに浅いものであったか、ということである。入学以来、TLPに参加して中国語を集中的に学び、中国人の多数の友人と交流する中で、自分は一般的な日本人よりも深く「中国」というものを理解している気になっていた。しかし今回の研修を通じて、自分が知っていた「中国」はほんの一部分にすぎず、ましてや中国や北京について様々な角度から「深思」したことはなかったのだと思い知らされた。

考えてみれば、今まで自分が経験してきた「中国との国際交流」は、それが大学のプログラムであるにせよ私的な友人付き合いにせよ、基本的には自分と同世代の中国人学生と、自分たちにとって身近な話題を語り合う程度にとどまるものであった。しかし、この一週間で出会った先生方はみな、中国文化のプロフェッショナルであり、かつ中国の歴史を肌で体感してきた方々である。そのような方々が語る「中国」は圧倒的なリアリティをもっていた。通り一遍の教科書的な知識でもって「中国」というものを語ってきた自分にとって、このような先生方の考え方や経験はとても新鮮であった。このような機会は日本ではもちろん、中国にいたとしても得難いものであり、自分の「中国観」に大きな影響を与えたことは疑いない。

この一週間で、政治・経済・文化などの様々な分野における知識を蓄え、いろいろな考え方に触れることができたが、当然、たった一週間ほどでこの国を深く理解できるようになったとは到底言えない。しかし、少なくとも、自分の「中国」理解がどれほど浅いものであったかを知ることができたことは大きい。このプログラムで得た何よりの学びは、自分の理解に対する驕りを捨て、謙虚な姿勢でもって「中国」という他者を理解することに努めていくべきだということである。その上で重要なのは、教科書やネットで得られる情報にばかり目を向けるのではなく、中国人からの生の情報に触れていくことであるとも感じた。もちろん、全ての情報には発信者の立場が反映されており、それらが無批判に鵜呑みにしていくことは望ましい態度とは言えない。大切なのは、「客観的」な情報など存在しない以上、いかに多くの情報源を持ち、いかにしてそれらの情報を統合して自分なりの見解を持つか、ということであると思う。これからも「中国」との関係は一生続いていくと確信しているが、このことを決して忘れずに、「深思中国」に努めていきたい。

(宮関貴臣)

歴史と文化の集積地

野中 崇遥

すべての土地には、歴史がある。北京もまたしかりである。そして北京には、民族の交代も含めた豊かな歴史がある。北京の街を歩けば、この街がたどってきた歴史の一端を垣間見ることができる。今や北京は高層ビルの立ち並ぶ巨大都市であるが、古い街並みや歴史的物件がたくさん残っている。胡同や四合院といったものはそのあまりにも有名な例であり、中国各地で見ることができ。最近ではそのような場所が観光地化され、多くの観光客の姿を見ることができ。

私はここでは、プログラム最終日（つまり帰国の日）の午前中に訪れた北海公園について、そこで見たものと感じたことをもとに、このプログラムで学んだ知識を織り交ぜながら、歴史と文化についての考察を行いたい。北海公園は今回の研修中の唯一の自由時間であった最終日の午前中という時間を利用して私が個人的に訪れた場所であるけれども、私にとつてこの公園を訪れたことは歴史や文化について考えるうえで非常に重要な示唆を与えてくれた。また一週間の研修を通じて学んだことがここでの発見を大いに深めてくれた。

北海公園には、研修に参加していたもう二人の東大の学生と、さらに本研修で知り合った一人の中国人の方と一緒にいった。一緒に付き添ってくれたその方は何度も日本を訪れたことがあるという「歴史オタク」で、日本と中国の歴史に非常に詳しく、道

中話が非常に盛り上がった。彼との会話も、歴史と文化について考えるうえで大きな示唆を私に与えてくれた。その内容もまとめてここに記そうと思う。

一、北海公園の歴史

北海公園は、どこにでもある普通の公園ではない。この場所は世界最古の皇室庭園の一つといわれる。そしてこの地の歴史は、実は北京の歴史そのもの、ひいては中国の歴史と深い関係がある。世界中のどの都市も、その場所が都市として機能するためには、ある一つの重要な要素を持っていなければならない。それはすなわち「水」である。水がなければ、人間は生きていけない。水がある場所に都市は生まれ、豊かに発展していくことができる。北京も例外ではない。

北京には、「海」とよばれる巨大な湖がある。北海はその一つである。いま天安門広場があるそのすぐ西に、北から順に後海、北海、中海、南海とよばれる大きな湖がある。当然これらは海ではないのだが、その巨大さゆえに海とよばれている。そしてこれらの湖を海と形容したのは、遼を建国した契丹人である。中国北方に存在していたモンゴル系民族である契丹人は、多くの水がある場所を「海」とよんでいたのである。それ以来、これらは実際は海であるわけではないにもかかわらず、海という名称でよばれている。この事実だけでも、北京が異民族によつて統治された時期があったという歴史を示していて、興味深い。

そしてこの庭園の歴史は、今から約一〇〇〇年前の遼代に始まる。その後金、元、明、清、と王朝が交替し、統治民族も契丹から女真へ、女真から蒙古へ、蒙古から漢族へ、そして再び女真（満

州族)へと交替していくなかで、北海は皇室御苑の所在地であり続けた。明では当初都が南京に所在していたが、永楽帝が北京に遷都し、清では当初都は瀋陽にあったが、すぐに北京に移される。この地は歴代皇帝と密接なかわりがある。元のフビライもこの地を首都としていて(当時は大都とよばれた)、現在の北京の礎となった。この地は中国の歴史上非常に重要であり、中国の歴史と切り離すことは絶対に不可能である。

二、北海公園、朝の日常

私が北海公園を散策したのは、日曜日の朝、八時半から十時ごろまでである。休日の朝から、公園は多くの人でにぎわっていた。公園内では菊の展覧会が行われていて、多くの人が花を観賞していた。日本の菊も大々的に展示されていた。公園内を歩いてすぐ目に付くのは、そこらじゅうで人々が踊り、歌い、談笑に興じていることだ。太極拳や民族伝統の体操、北京の古い音楽や内蒙古の伝統音楽、さまざまなものがこの地にまじりあって存在している。朝から公園内は活気にあふれている。およそ日本では見られない光景である。公共の場所で音楽を流して踊っていたら、日本では最悪通報されかねない。京劇の録音を流して、それに合わせて声を出しながら体を動かす人もいた。

そして歌や踊りに興じる人々は、たいいてい年齢層が高い。一緒に公園を回った中国の方によると、このような光景は中国ではありふれていて、お年寄りはお外で集まって過ごすのが好きで、彼らほたいいてい月パスを持っていて(公園に入るには入場券を買わなければならないが、彼らは一か月券を買っていて、頻繁にここに来るといこと)、ほかの人と一緒に時間を過ごすものである



北海公園、踊りに興じる人々

という。このように中国の市民の性格は開放的であつて、彼らが日本に來たりすればすぐ「うるさい」と思われてしまうのも、こいう性格に起因するところが大きいという。確かにその通りであつて、公共空間を本當の意味で公共の場所として積極的に利用する感覚は、日本にはあまりない。

また、地面に文字を書いている人もいた。文字を書いているといつても、決して落書きをしているわけではない。筆に水をつけて書いているのである。水で書いているだけだから、時間がたてば文字は乾いて消える。そしてその文字と、文字を書く人の周りをまた別の人たちが取り囲んで眺めている。私が見たときは、ちょうど小さな子供が、一人のお年寄りから筆を受け取って文字を書いていた。私がいちばん驚かされたのは、地面に書かれた文字が、非常に達筆であったことである。どこからどう見ても、素人の筆跡ではない。地面に文字を書いていた女性は書道の先生をやつていて、こうして趣味でこの公園で地面に文字を書いているようである。これも一緒に公園を回って歩いた方から聞いてわかつたことだ。



上…北海公園、地面に文字を書く人

下…五里坨民俗陳列館、老北京の様子を模したパフォーマンス

三、歴史と文化について考える

北海公園で見られた以上のような光景は、中国の一つの市民文化の表れである。そしておもしろいのは、この地は同時に実に遠大な歴史を有し、多くの歴史的建築物が存在しているということである。湖の中央には清の時代に建設されたチベット式白塔がそびえ、公園の各地にあずまやや仏像、彫刻、石碑がある。建物の壁に、モンゴル風の騎乗の様子が描かれた絵画がくくりつけられている。北京のさまざまな時代の、さまざまな民族の遺物が、混在している。そしてそこを訪れる人も、太極拳や伝統音楽、京劇、書道など、これも中国の文化とは切り離せないものを、めいめい楽しんでいようである。

日本では、「他人に迷惑をかけない」というのが一つの美德とされる。そして公共空間におけるこうした行動は、そうした考えの延長にあつて、白い眼で見られがちである。日常のレベルにおいて、人々が外に出て自ら歴史と文化を活性化させていく共同体のようなものやそうした風潮は、あまりないように思われる。そして中国のこのような市民文化は、日本ではあまり報道されない。飛びこんでくるのは自国の利害に係る報道ばかりであつて、こうした当たり前のことは、知られないままなのである。

とはいえこういった光景も、中国の歴史や文化のほんのごく一部を示しているにすぎない。なにごとも、我々が気付かないうちに消えてなくなつていく。急速な現代化のなかで、多くのものが失われている。北京にも「老北京」という言葉があるように、古き良き北京、昔懐かしの北京に対する何らかの感懐があるのではないだろうか。そして実際、かつての北京の様子を懐かしみ、そ

の光景を映画や小説で表現する人もいる（映画監督の陳凱歌も、その一人である）。日本もそうだが、やはり我々は、生活が物質的に充実してゆくにつれ、結局自分は何のために生きているのか、という根源的な疑問にぶつからざるをえない。特に先進国においては、経済成長があるところで頭打ちになると、国は安定する一方、未来に対する国家的な展望も持てなくなる。中国は巨大な国であり、国内における格差が大きく、依然経済発展の余地は大きい。しかしながら少なくとも都市部において、人々が失いつつあるものへの悲しみや危機感の表明が行われていることは無視できない事実であるし、このような声は、今後ますます深まっていくものと思われる。そしてこの北海公園の光景と比較することで、日本の都市住民の抱える深刻な問題も浮かびあがってくる。

「他人に迷惑をかけてはいけない」という一種の協調性が重視される日本では、かえって、他人と距離をとるといふ非協調の状態が生み出されているといつてよいだろう。外に出て、その空間をその場にいる人と共有し、自らの生活を形成するような場がないために、生活が次第に個人で完結するようになる。他者を意識することで、かえって他者から遠ざかって自分の周りから他者がいなくなり、開かれた共同体が形成されなくなる。我々は本当にそのような生活を送りたいのだろうか？

しかしここで中国のこの開放的な気質を美化しても何の意味もない。中国でいま見られるこのような光景も、何もしなければ消えていくだろう。そして消えてしまったものは、二度と戻りはしない。歴史でさえ、忘れられればなかったことになる。

何かが消えていくことを止めるのは難しい。なぜならそれは、その消失がたいい自然なものとして行われるからだ。権力に

よって消されるものがあるとすれば、それはその権力を止めれば消失を食い止められるかもしれない。しかし、誰のものでもなく、その存続も消失も誰かの責任に帰することのできない日常の次元のものは、その存在を簡単に左右することはできない。あるものは自然の流れとして消え、あるものは残る。そして何物もいわずらに残せばよいというものでもない。

しかしながらいま目の前にあるもの、自分の目に飛びこんでくるものは、すべて自分を相対化するものさしとすることができ。当たり前だと思っていたものが、実はそうではなかったと気づききっかけを与えてくれる。この北海公園での光景は、我々の共同体のありかた、生活のしかたに対する新たな視点をもたらしてくれた。人間は自分の置かれた境遇を基準にものを考えてしまう。いま目の前にあるものをしっかり見つめ、はじめて新たな視座を獲得できるようになる。

以上

ありのままを見よ

思ったこと、感じたことを素直に書き記す。

まず、中国語力の圧倒的不足。なかなか聞き取ることができず、話についていけなくなることが多かった。聞き取れたとしても一部だけで、なかなか話の流れがつかめなかった。逆にそれなりに聞き取れたときには、あと少し語彙力があれば間違いなくもっとおもしろかっただろう、と思えてはがゆかった。人民大学の学生との交流も、どうしても言葉が出てこず、なかなかスムーズに話せない場面も多かった。これらの経験は、今後の中国語学習の大きなモチベーションとなるはずだ。必要に迫られてさせられる勉強ではなく、彼らが何を言っているのか理解したい、自分も彼らと話をしたい、対話したい、そうすればもっと大きな世界が開けるはずだ、そのような展望をもとに勉強するのだから、勉強が楽しくないはずがない。というわけで、様々な人に会って話を聞き、対話するという得難い機会があったものの、私はどうしてもその機会を最大限生かしていたとはいえないので、とても悔しい思いがする。それでも、たとえば、五里坨民俗陳列館での陳先生の北京の歴史に関する講義は、高校の世界史で中国の歴史を勉強したことがあったから頭に入りやすく、北京という一つの都市にしぼってその変遷を知ることができたので、とてもおもしろかった。こういうときに、あと少しでも語学力があればもっと多くのことを知ることができたはずだ、ということを感じさせられた。

一方強く印象に残り、私の胸を打ったのは、北昆の鑑賞と、五里坨民俗陳列館での老北京の様子を模したパフォーマンスである。どちらも私にとっては新鮮で、感動した。そして私の興味分野である文化保存という問題について考えさせられた。北京は急速に近代化し、中心部にはそこらじゅうに高層ビルが立ち並んでいる。しかし北京の街を歩くと、胡同などの古い街並みを見ることができる。そのような光景は、残念ながら少しずつ見られなくなって行って、活気も失われてしまう。しかし「老北京」という言葉があるように、何よりも中国人自身がまず、失われつつある古き良き北京の様子を心に思い描いて、懐かしんでいる。今自分がいるまさにこの場所は、以前はどのような場所だったのだろう。今いるこの場所にも歴史があって、今見ている光景は、決して不変のものではない。ここには、かつてはあったが今はない何かがあったのだ。そのようなものを残していくために、ある者は文学作品で、ある者は劇や歌で、自ら伝統に立ち入りつつ、その担い手となっていったい

る。またある者は博物館を運営し、展示を通して歴史や文化を伝えようとする。私が今できることは、今あるもののありのままの姿を、自分の目で見ることだと思う。

最後の帰国の日の午前、私は中国の方と一緒に北海公園を見て回った。その歴史を遼代にまでさかのぼることができるこの巨大な公園は、北京の壮大な歴史を伝えてくれる。時代を経るごとに様々な建築物や仏像が作られ、私が訪れた際には菊の花の展示もやっていた（日本の菊も、大きく取り上げられていた）。公園には踊りや歌に興じる人、ラジオを聴きながら散歩する人、水で地面に文字を書く人などがいた。開放的な雰囲気、日本とは違っている。歴史に満ちたこの空間に人々が集う。長い歴史と文化が、この地に凝集している。私は一緒に行動をともにした中国の方と、いろいろな話をした。彼は、このような中国の活気を見れば、中国のことがよくわかるという。日本人の「中国人はとかくうるさい」という言説も、この開放的な雰囲気を見れば、それが彼らの元来の気質だということがよくわかる。彼はいわゆる日本の歴史オタクといった感じで、日本のことを私以上に知っているが、私が仕事は何をしているか尋ねると、一介のサラリーマンだという。日本にも何度も行っているが、それは趣味で、仕事とは一切関係ないらしい。彼は日本のことが好きで、とことん自分で勉強し、友達を作って、今このように私を案内までしてくれている。まさに「グラスルーツ」の交流であった。

一番心強いのは、最近、時代の流れとともに失われていくものに対し、それらをなつかしみ、できるならば残しておきたい、そう願う人が多いということを知ったことだ。現代化した生活と古き良き文化は、常に矛盾してしまうのだろうか？ われわれは歴史と文化を背負って、どう生きていけばよいのか？ 一人で考えこんでいては、結論は出ない。でも少しずつ、ほんとうに少しずつ、自分ができることについて、今日の前にあるものをこの目で見て、考えるようになった。そしてそこにある何かがなくなる前に、それを自分の目で見て、記録にとどめておきたい。そうして発信していきたい。誰もが見ないものほど、自分はしっかり見つめていたい。

(野中崇遥)

活動報告

【思考篇】

中国と「語り」

嶋田 泰之

深思北京のプログラムでは政治・経済・文化の各方面で活躍している中国の方々からお話を聴く機会に恵まれた。そして、分野横断的に北京という都市や、北京で活躍する人々とその活動について学ぶことができた。

その一方で、先生の指摘にもあつたように、ゆっくりと思考する時間的及び体力的余力を十分に持てなかつたことは遺憾であつた。

その状況下でも私がとりわけ考えさせられたことは、中国において「語る」ことの深さであつた。第一に中国内で共有されている文化的背景は、理解の足りない者がその話の内容を理解することを妨げる。文化旅游部では、歴史的に共有しているものの差異のために、欧米に「中国」を発信する方が日韓など東アジアへの発信よりも難易度が高いという話があつた。例として唐朝が挙げられていた。日本は唐から文化・政治・経済といった多くの側面で影響を受けており、大体何年頃にあつた王朝なのか知っている日本人も多いだろう。一方でヨーロッパもシルクロードを通じて中国と当時から繋がっていたが、その存在を、歴史を学ぶ中で強く認識している人は少ないだろう。それが今日、中国を伝える上でも難易の差を生み出している。また、日中の歴史及び文化的に共有しているものが比較的多いとは言え、中国で教育を受けてい

る人々ほど中国の歴史や文化の知識を得るのは容易ではなからう。実際に人民大学で授業を受けている時に、論語の注釈本に関して話の内容の前提が分からず、なかなか理解が難しかった。それらは異文化をよりよく理解していることで、その異文化を有する他者への理解がより容易になるというだけではない。長い歴史や、文化大革命を経てもなお言葉や知識、文化の中に残る伝統への理解が、中国の場合は、とりわけ中国人とのコミュニケーションの中で試されるからこそ、理解が深ければそれだけ相手のことを深く理解できるという面白さがそこにはある。今回のプログラムでは中国以外の国に触れて比較を行ったわけではないが、中国における語りを理解するのに文化的背景への理解が欠かせないのは確かであろう。そして、今グローバル化の中で世界的なスタンダードとも捉えられることの多い西欧の文明とは異なるものだからこそ、その理解は一筋縄ではいかない。



人民大学の歓迎会にて。朝早くから先方の学生や先生が集まって、私たち東京大学からの訪問団を歓迎して下さいました。



中国の外交部のシンクタンクにあたる盤古智库にて。公的な立ち位置にある機関でお話を伺うのは非常に緊張感があった。

第二に中国の公共空間の重さも、中国において語ることに、そして話を伺うことに複雑性を与えているように思われる。今回のプログラムでは、中国外交部のシンクタンクである盤古智库や文化旅游部といった政府系機関にも赴く機会があった。そこで実感させられたのは、自分の知りたいことを知ることは非常に難しいということだった。せっかくなお時間をいただいて話を伺わせてもらっている以上、インターネットで調べればすぐわかる内容を伺っても致し方がない。とは言え、公的な立場の下で語る中で、公的な見解から逸脱することができないのは、中国のみならず公人として働く者なら当然のことだろう。ただ、その公的な壁の厚さが相当なものであると感覚的に思わざるを得なかった。それでは、公的な場において、それもとりのわけ中国の公的空間において、相手を深く理解するには何が必要なのだろうか？相手の個人的な意図や、公的な見解の奥にある意図を理解するために足りないも

のは何だろうか？そもそも公的空間においてそれらを理解しうるのだろうか？中国の公的な語りをどのように理解すべきなのか、それは技術的に克服できるものなのか、相手との個人的なつながりの強さなのか、他の何かが必要なのか、これらは今後しっかりと考えていきたい課題だと思っている。そして今まだ私の中で答えはない。

第三に今回のプログラムはどのような中国が語られる場所として意図されて設定されたのかということである。ある友人が同時に異なるプログラムで北京やその周辺を訪れていた。彼が参加したプログラムでは、boxfishという民間のベンチャー企業や首都機能を分散しようとしていると言われる雄安新区、または高齢化の問題に対処する国安養老などを訪ねたようで、まさに発展を続けながら社会問題にも対処していく中国の側面が描かれていたように思う。その一方で私たちの「深思北京」では愛慕公司のように活躍している民間企業を訪ねる機会もあった一方で、法海寺やその周辺、もしくは五里坨を訪れたり、北京の歴史等の授業を受けたりする中で過去から現在、そして未来へ続いていく北京が語られていたように私は受け止めている。この場を使って、より詳しく一週間のプログラムで語られた中国と北京、即ち何が語られて何を語る時間が足りなかったのか考えてみようと思う。

一つ目として、前述したように、過去から現在、そして未来へと紡がれていく北京の歴史を学ぶことはできた。北京という都市の歴史の授業を受けたり、法海寺や周辺や五里坨で老北京の雰囲気を楽しんだり、宋慶齡青少年センターでは今後の中国に関わる最先端の科学技術を駆使した遊び場を見たりもできた。また二つ目として、重複する部分もあるが、文化的側面にも多く触れた。

京劇、昆劇、茶や衣服、習俗、書道などである。さらに三つ目及びお四つ目として、盤古や文化旅游部が位置する政治の中心として、及び経済的な大都市としての北京も語られていた。五つ目として、北京の諸方面で活躍している人々がどのような人々なのか、知り考えることもできた。どの人々も歴史、文化、経済、政治の複数領域に造詣が深く、その上で自身の専門的な強さを持ち、活躍していらっしゃるようだった。また、これからの中国の中国語教育や文化、学問研究の一端を担っていくはずの人民大学の学生とも問題意識の共有や交流等できた。六つ目として、日本との繋がりとという側面が語られることはしばしばあった。日本に対して「中国」を発信している人民中国に赴いた他、何らかの形で日本との繋がりを持った方々からお話を伺う機会が多かった。

以上より、時間軸としても分野的な軸としても広く中国と北京が語られていたプログラムだった上に多くの人から語りを聴く機会を得られたことがよく分かるが、語られなかった側面の一つとしては中国の「老百姓」からの視点が一つ挙げられるだろう。即ち、一般大衆に当たる人々が今の変化し続ける中国をどのように生きているのかという点にはあまりスポットライトが当てられなかったように思う。より活発な民間交流の重要性については何度も話題に上ったが、肝心の民間交流の担い手たるべき人々がどのような人々か分かっていない。日本と中国や北京の繋がりがしばしば映し出されていたと上述したものの、都市に住む中国の一般的な社会人並びに家庭生活を営んでいる人々は、日本をどのようなに見ているのか、もしくは現在の中国での生活にどのような感想を持っているのか、また、農村に住んでいる人々は別の考えを持っているのかなど、今回のプログラムの中で直接知ることはできな

かったが、理解していく必要がある。

ここまで私は中国とその語りについて、文化的背景の重要性、公的空間の語りへの影響、そもそも今回のプログラムで語ることが企図されていた内容という三つの側面から考えてきた。中国や北京を学ぶと一概に言っても、あまりにも多くの分野や視点があるため、もしくは公共空間の特殊性故に、語りの内容や語り口を限定せざるを得ないこと、または語りを理解する上での制約が存在するということが、そして中国の場合はその制約に他国と異なる特殊性や面白さがあるということ論じてきた。中国による語りという文脈では、二〇一三年八月一九日の全国宣伝思想工作会議で習近平総書記が「講好中国故事、伝播好中国声音」という姿勢を強調して以来、中国による対外宣伝は方向性を再確認して発展している。その時には、世界的に訴求力のある普遍性を伴った形式で中国の文化や思想が発信される。しかしながら、その時にも語られている中国と語られていない中国があることを忘れてはならないだろう。むしろ、中国が何を語ろうと企図しているのか、しっかりと認識することが中国と向き合う日本人としては重要であると考える。同時に、どのように語ろうとしているのかという視点も欠かせない。たとえ、中国が平和を建設し、グローバルな発展に貢献し、国際秩序の擁護者たろうとする高邁な考えを有していたとしても、その思想の具体的な実現過程においてその思想の本質が判断され得る。近年は中国が一带一路のような戦略を立てて国際的な地位を確立しようとする中で、ミャンマーやスリランカにおける「債務の罠」への警戒、日本での中国人観光客のマナーへの厳しい視線、オーストラリアへの浸透工作とそれに対する国民の反発、アメリカでの孔子学院への監視強化など様々な軌



五里坨にて食した老北京の小吃。美味しい甘い食べ物と共に、政治から文化まで幅広く交わすことのできた会話は思い出深い。

轢も発生しているというニュースがある。それは政治的な対立だけでなく、文化的並びに個人間における対立も含まれている。接触が増えると理解が促進されるだけでなく誤解や衝突が生じうるのは容易に予測できることである。中国はそれにどのようなように対処していくのか、そして我々はどのように受け止めるのか、これらのことを語り手とその受け手は再考する必要がある。現在の対立が未来の共栄のためのワンステップと位置付けられるか否かは、今中国による語りとどのように向き合うのかにかかっている。

また、中国において語るということは公私問わず複雑性を帯びている。そしてその公私の境目も曖昧である。それでも相手の考えを理解するためには如何なる技能や努力が必要なのか、今後答えを探していきたいとも考えさせられた。

再出発

これまで中国に赴く機会は幾度もあった。北京は今回のプログラムが4回目の訪問となった。大陸と港澳台を合わせると、14回目の中国訪問であった。長期滞在をしたことはなく、長くても1ヶ月程度台北に滞在していたくらいだった。

これまで中国人の方々と関わる機会は幾度もあった。中国に赴いた時のみならず、東京大学と南京大学のフィールドワークや、東京大学とソウル大学、北京大学の3大学の交流イベント、もしくは中国に関連するコミュニティでの出会いなど、中国人の友人や知り合いは多くいる。定期的に連絡をしている友人もいれば、時折思い出したかのように会話をする友人もいるし、イベントになるとよく会う知り合いもいる。

端的に言えば、中国に赴いたり、中国人と関わったりする機会はこれまで豊富にあったのである。しかしながら深思北京ではこれまでと異なる人と関わる機会を得ることができ、北京や中国、そして中国人を多角的に考える契機となった。政治や文化、経済など、様々なフィールドで活躍していらっしゃる中国人のお話を何時間も密に伺う機会というのは初めてであった。僕にとって、社会人になる来年以降にはこのような方々と関わる機会が増えていくのだろうと身の引き締まる思いであったと同時に、まだ学生のうちから非常に有難い機会を得られたことに感謝の念を覚えている。

このプログラムはTLP中国語上級の研修として実施されていて、中国語を運用して更に先の学びを得るもののはずであった。ただ、中国語の活用の前に、自身の力不足を痛感し、また自身の語学の今の立ち位置を知ることができた。そのこともきっと中国語能力向上に役立ち、TLPの学生として外国語を操って外国をより深く理解する道のりにとって欠かせない1週間となったと考えている。

7月に勤め先が決まり、10月には中国語が研修語学と定まり、それ以来、中国に対する自分の心の持ちようは確実に変わった。この中国を舞台に世界の安定や平和の維持のために微力ながら働くのだと、当事者意識や責任感が更に強まっている。僕は近いうちにまた北京に、中国に戻ってくる。その時に、自分がその使命に少しでも耐え得る力を身につけているよう励もう。このような気持ちにもなる北京研修だった。長かったようで短かった4年間の大学生活が終わろうとしている中で、気持ちを引き締めて次のフィールドへと向かうための良い研修であった。

(嶋田泰之)

「食」

大門 かおり

私は多くの人が食卓を囲んで一緒にわいわい食事をする中国料理が大好きだ。今回の北京研修でも様々な料理をいただき、それらに関する様々な知識を教えてください、中国と食の関係についてより多くのことを知りたくなつた。帰国後得た知識とそれに関する私の考えを少しまとめてみたい。

一、中国人にとっての食

広大な土地と四〇〇〇年もの歴史を背景に発達してきた中国料理は調理法や素材、食べ方まで様々でも一口で語れるものではない。それぞれの土地で、食材へのこだわりと素材の特質を生かした調理技術へのあくなき探求がなされ、揺るぎない独特の料理文化が形成されてきた。また、長い歴史の中で異なる民族が互いに影響しあい、食文化を豊かなものにしてきた。

中国には昔から「民は食をもって天となす」（民以食为天）という言い方があり、中国の歴代統治者は食の問題の解決を国政の重要任務としてきた。古代では皇帝以外の最高行政長官は宰相であるが、この「宰相」という言葉も、その由来は貴族の家の食事を作る料理人である。食の問題を重視することは「吃」を含む言葉が、軍事、経済など社会生活の各方面で使われていることからわかる。また、日本人は挨拶をするときに「いいお天気ですね」と、天気を話題にすることが多いが、中国では日頃の挨拶と

して「ご飯食べた？」と言うように、食べるということが日常の挨拶にまで発展、浸透している。このように、官途につく人も庶民も食の問題の解決を人生の主な目標としたのは、食事を重視する中国の風土と昔の小農経済社会の交際習慣に由来するものだと思う。当時は生産水準が低く、食糧不足が一番の問題だった。それで顔を合わせると食事を済ませたか尋ね、相手への関心を示したのであろう。

中国料理の根底には食物により健康を保持し、病気の予防や治療をし、老化を防いで長寿を保つという「医食同源」という考え方がある。食物を、腹を満たすために食べれば食、病気の治療のために摂取すれば薬と呼ばれるにすぎず、「薬食帰一」という言葉が示すように、全ての食物は薬としての効能を持っているとする。特に、効能がある漢方薬と色々な食物を組み合わせ、薬効を失うことなくおいしく食べられる方法をあみだした薬膳料理は、高齢化社会の中で健康を保ち、老化を遅らせるための食事として大いに参考になると思う。現在、中国に八〇年代後半に一斉進出した米資本のファストフード店は、「食にうるさい中国人に受け入れられるだろうか」という当初の予想を裏切り、日常生活の一部として完全に浸透している。経済発展に伴い都市部では、外食も増えて伝統的な家族団らんの食生活が崩壊しつつあり、食養の考え方は改めてその存在意義を増してきていると思う。

また、他の国々では食べないような珍しい食材が食卓に上るのも、単に贅を尽くしているのではなく、それぞれの素材が持つ優れた薬効を知っているからだと考えられる。と同時に、中国は多民族国家であり、多種多様な生活習慣や地理環境の中で、様々な食材の様々な部位を様々な調理方法で食べるように進展してきた

のであろう。やや誇張した言い方だが、「広東人は空を飛ぶものなら飛行機以外何でも食べる、四つ足のものなら机と椅子以外何でも食べる」という言い方がある。外国人からみれば、野蠻かもしれないが、これは人類社会の発展に伴い、人々の生活と密接して発達してきた食文化であり、基本的に尊重されるべきだと思おう。食文化は、時代性と伝統性をもっており、歴史背景・民族の特徴・地理的な位置、さらには宗教思想などを反映し、一国のアイデンティティともなっている。中国の食文化はこれからもその伝統を受け継ぎながら、他の文化を吸収・融合し、独自の発展を遂げていくに違いない。

二、食の不安問題

以前、中国から輸入された冷凍ギョウザに毒が混入し、日中間で大きな問題となったが、中国では、コストを追求するあまり、食品の賞味期限を偽装したり、材料をごまかしたりする事件は後を絶たない。食の安全を巡る事件は日常茶飯事になっており、食品に対する信頼が崩れてしまっている。

現在の中国社会は、格差の拡大など種々の矛盾と対立が激化しているが、大混乱に陥るほど情勢が緊迫しているわけではない。それは民にとって食べることが最優先であり、食によって中国の社会安定が担保されているからであろう。逆にいうと、食べることで保障されなければ、中国の社会は安定しなくなる。したがって、冷凍ギョウザや粉ミルクへのメラミン混入など食の安全を脅かす事件はまさに中国社会を混乱に陥れる出来事であったであろうことは想像に難くない。

食の安全を担保するためには、行政の監督官による監督・監視

を強化し、関連の法律を整備すべきである。同時に、法律を守らせる司法制度を整備し、強化する必要がある。現状では、政府の監督部門は監督責任を十分に果たしていないが、その背景の一つに、政府の幹部たちに安全な食品を特別に供給する特別供給制度の存在がある。政府の幹部たちが食べているのは、通常の小売ルートで流通する食品ではないため、国民が毎日食べている食品が安全かどうかに関心がなくて当然だ。政府の監督部門に監督責任をきちんと果たしてもらうためには、まず、特別供給制度を大幅に縮小する、といった見直しが必要だ。

しかし、それだけでは不十分であり、日本の鮭屋のようにカウンター席を設けるなど客の前で調理するという方法により透明性を確保すること、さらには、食品の生産・供給過程に関する情報の透明性を拡大させることも必要である。この点では日本の、「私が生産者です」と顔写真のついた製品や、バーコードを読み取るだけでその製品が手元に届くまでに辿ったルートを確認できるシステムなどが大いに役立つと予想される。日本以上にスマートフォンを用いた決済が浸透している中国だからこそ、需要も相まって、一度影響力のある企業に取り入れれば一気に拡大すると思う。最初は時間も手間もコストもかかり導入は難しいだろうが、経済発展に伴う富裕層の拡大を背景に、成功すれば企業イメージの向上、購買層の拡大など多くのメリットが予想されるだけに、長期的戦略としての導入を期待したい。同時に、フェアトレード同様、消費者としてもより安く、より早く、より多く生産がなされなくとも我慢する努力が必要であろう。需要があれば、悪質業者がいくら摘発されても、モグラ叩きのように、次から次へと悪質業者が現れてくるのだから。

三、割り勘と持ち回り

日本では割り勘がごく普通に見られる光景であるが、中国人同士の食事会で彼らが割り勘にすることは、友達同士でもほぼない。会計の時には誰かが伝票を手にし、それを周りも自然に受け入れる。次の集まりでは、他の誰かが支払いをする。このような貸し借りによって次回また会うきっかけを作り、人間関係を続けていく。交代で費用を持つ、持ち回り精算は、人情第一で何事をするにも人脈が大切、という中国人のやり方にぴったり合った方法だと思う。それゆえ日本人の割り勘スタイルは、おごったりおごられたりすることで人間関係をつくってきた中国人にとつては冷淡な印象を与えるかもしれない。しかし、互いの面子を保ちつつ、人間関係を複雑にすることなく、対等な立場で話をすることを可能にする方法と考えれば、割り勘も透明性があつていいと思う。最近では、たくさん食べる人とほとんど食べない人、たくさん酒を飲む人と全く飲まない人が食事する時に割り勘では不平等感を感じる、女性が経済的に独立して生活してゆくことのできる社会であるにも関わらず、男性が女性の分も全額払うのは女性軽視につながるのではないかなど様々な意見が出ているようだ。私に言わせてみれば、どんな方法を取ろうとも全ての人を満足させることはできない。どちらの方法にも賛成派と反対派が存在するが、日本の割り勘は「毎回平等」、中国の持ち回り精算は「最終的に平等」というだけの違いであり、日本も中国も結局は平等に負担することになることに代わりはない。相手との関係性などを考慮し、相手の立場に立って考えることで、時と場合にあつた会計方法をとることができるのではないか。

四、中華料理と中華街

改革開放以来、政府は観光誘致と民族文化の振興に力を入れ、時には補助金を交付して、食文化の発展に寄与した。孔府菜・彷唐菜・彷宋菜・彷清菜などを復活させ、「中華老字号」いわゆる「中国老舗」を選定し、食文化の進展を一層高めている。近年の経済発展により国力が充実し、自ずと文化へ目が注がれるようになった今こそ、中国は歴史に裏打ちされた底知れぬ力を発揮する時だと思ふ。四大料理のほか、それぞれの地方に独特な料理がある上、世界中どこに行つても中華料理のレストランがみられることを考えれば、料理こそ世界を征服する中国のソフトパワーだと思う。

また私は異文化交流地点として、ほとんどが中華料理屋の集合体であるチャイナタウン（中華街）に着目したい。両国間の民間人の行き来は異文化理解のために非常に意味があるので、日本人にもっと中国に行つてほしいという意見をよく耳にするが、時間・金銭・語学力などの面で難しい人も少なくない。その点で中華街は、「食文化」を通して互いに相手のことを知り、交流することのできる場所として身近かつ最適な場所だと思う。世界に点在するチャイナタウンは普通、中国人が集まるための場所だが、日本の中華街は、「春節祭」など中国伝統文化をベースにした「中華街の伝統行事」を目当てに、大勢の日本人も遊びに行く場所だ。中華街は中国人のルーツを意識しながら、地域の特徴を活かし差異化を図ると同時に、日本の中で受け入れられ溶け込むように工夫が凝らされている。江戸時代から続くその歴史の中で、日中両国の歴史を反映しながら、「中華街」というブランドとして日本社会に定着している中華街は、お互いに相手のことを知らないままに感情的に「嫌い」と言う人が多い現在において、日中交流の

目指すべき道筋を教えてください。はすだ。



「知り」、「守る」

北京研修の8日間は毎日が新しいことの発見でとても充実していた。一番のポイントとしては、中国語を日常会話の言語としてではなく、学問やビジネスを論じる言語として先生方を相手に用いる貴重な機会を得ることができたことがあげられる。拙い中国語による質問・感想であっても、皆様暖かい目で見守ってくださり、そして真剣に答えてくださったため、徐々に発言することに対する恐怖心は薄まっていた。また中国人民大学でも、交流した相手が皆大学院生であったため、児童に対する指導経験があるような学生も多く、私にも理解できるよう、わからない単語が出てくると簡単な中国語に直してくれたりした。終始アットホームな雰囲気の中での交流ではあったが、私の中国語は相手の意見を完全に理解し、ありのままの自分の意見を伝えるのに十分なレベルではなかったため、相手の中国語を一言でも多く聞き取ろうと絶えず意識せねばならず、英語のように、内容にのみ注目して聞けるようになるにはまだまだ努力が必要だと再認識した。また、日本の文化等に対する深い知識と関心を持った学生たちと議論を交わすことができたことはとても興味深い経験となった。中国という隣国だが、思想背景も教育制度も異なる国で育ってきた彼らと我々の見解の差は、様々な知見と、我々にとって当たり前になってしまっている物事について考え直す機会を与えてくれるものであり、今後につながる経験であったことは間違いない。

中国の伝統文化には、明代の姿をそのままにとどめている法海寺壁画や、昆曲・京劇のように現在でも残されていたり、継承されていたりするものがある中で、長く複雑な歴史の中で消えてしまったものや、男旦のように一度は無くなっても復活したものもある。五里坨民俗館で老北京の踊りや音楽を間近で見せて頂き、昔ながらの伝統はやはり趣があって良いものだと思改めて感じさせられた。一方で、簡単に「伝統は守るべきだ」と言うけれども、本当に「守る」とはどういうことなのだろうか、という問いに対する答えを導くのはとても大変だと分かった。日本でもその当時の色に彩色し直した歴史的な建造物などを見ることがあるが、それが本来の姿とわかってはいても偽物のように感じてしまい、長い年月を経て色あせたものの方がなぜかしっくりくる。また法海寺壁画の存在を観光客はおろか、中国人もあまり知らない。維持費などの面でより多くの人に知ってもらった方がいい反面、昔からほとんど知られていなかったため文革時も紅衛兵の破壊を免れたという歴史や、観光客が増えれば真っ暗な中を懐中電灯で照らす鑑賞スタイルの維持も難しくなるこ

とも考え合わせると一概にそうとも言い切れない。遺跡として残すのか、観光地として残すのか、存在自体は変わらなくてもその意義は一人一人の見方や行為により変わってってしまう。だからこそ有形・無形文化財の保護においては長い時間をかけて深い考察が行われねばならないと思う。それと同時に、文化の継承を担う若者たちにもその価値観が共有されねばならない。研修最終日、私はチャイニーズ・オーケストラの一員として二胡の練習をしている友達に会った。二胡は昆曲で使われる楽器とも似ており、そういった音楽の素養がある友達でも昆曲、京劇は上演時間も長く退屈してしまうと言っていた。また老北京の踊りや音楽を披露してくださった方々の年齢層も比較的高く、若者たちがその奥深さに気づき、自ら守りたいと思わなければ、いくら先生方がその有り難み・素晴らしさを説いても豚に真珠なのだ、伝統や文明の産物を守っていくことの難しさを実感した。

中国にはもともと興味関心を抱いていたが、今回の研修で一般的抽象的な国家の姿から、よくしていただいた先生方や友達が暮らす場所という具体的な姿に、カメラのピントを合わせたかのように、また一段と変化した。この8日間を通じて、先輩方との第二外国語の語学力の差を特に発話能力の点で思い知らされ、今後も気を引き締めて取り組まなくてはと思った。(株)ゼンショーホールディングス様、現地での講義や交流、懇談において大変お世話になった皆様、引率の鄧先生、朱先生にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

(大門 かおり)

中国理解と一帯一路

澁谷 宗之介

私は以前まで中国という国、そして人に対しても無知であった。というよりわかったつもりでいたが、それは間違えだった。そしておそらく多くの日本人もそうであろう。もちろん各々の興味関心に合わせて情報を多く吸収するのはいいこととして、そうではない部分には目を向けないのはいかかなものだろうか。私は大学入学後から、カンフー映画が好きだからという理由で第二外国語として中国語を選んだ。そんなちっぽけな理由で選んだものもの今となつてはその選択は正しかった。中国語を勉強してからというもの、私の世界は一三億人分広がったのであるから。時々、中国という社会はもはや国境というものを超え、概念化しているかのように感じる。つまり、多くの中国人と呼ばれる人々は中国と呼ばれる境界線の中にいるが、実はその境界を超えて物理的にも、精神的にも世界中にその広がりを見せているように感じることがある。彼らはあらゆるところで根を張り、コミュニティを形成し、さらなる仲間を引き寄せる。日本では特にその影響が大きい。我々が使う漢字はそもそも中国から渡来してきたものであり、ひらがなでさえも漢字が崩れたものである。歴史を通じて多くの思想・人も中国から日本へと流入してきた。日本のみならず、その広がりもはや地球の隅々まで拡大を続けている。

近年習近平総書記が一帯一路政策による経済圏構想を打ち出した。これを否定的に捉える見方は多い。さらに中国は米国との対

立から日本への接近もはかり、両国の友好が叫ばれるようになった。それと同時に双方のメディアにおいて相手国の扱い方も変容している。果たして実際にこれらが遂行されたときどんな未来が待っているのだろうか。この中国の拡大にはどのような意義があり、我々はどのようにして中国を理解していくべきなのかを自分なりに探っていきたいと思う。

中国はほんのすこし前まで貧乏な国であった。ところがこの二〇数年あまりで急激に成長を遂げGDP世界二位にまで上り詰めた。長く戦後復興成功モデルとして讃えられていた日本さえも一気に追い抜いてしまった。経済成長偏重で、大気汚染や人権侵害など人間やその生活・権利を軽視している、日本のメディアばかりを見ているとそんな中国イメージが無意識のうちに形成されてしまう。だが気をつけるべきなのはそのメディアでさえも我々に間接的情報のみを提供し、実際の人間との交流、生活の視点を提供してくるものではないということである。今回私が北京に訪れたのは2回目で、確かに大気汚染が深刻な時もあるが、時には雲ひとつない晴天の日もある。数年前に比べたらかなり良くなつてきているという。また食品安全管理も中国ではしばしば問題になり、日本でも中国産のものを避ける人が多い。そのためか、中国に行くとき親戚友人に伝えると往々にして食に気をつけると言われるが、気をつけるどころか私は中国に行くたびに各地でその美食 (meishi) に魅了されてしまい、もはやその為には中国に行くと言っても過言ではない。日本で言う中華料理と言うとエビチリやチャーハンなど典型的なものが頭に浮かんでくるが、エビチリは中国のものではないし、チャーハンもそこまで食べない。餃子は

主食であり、具も地域によって様々。その地域ごとに独特の食文化が形成され、日本ではお目にかかることのできないものばかりである。しかもほんの数元あればお腹いっぱい食べられるお店が豊富にある。

街角にも同じく様々な料理屋、小吃店が所狭しと並んでいるところがある。そのような地区に胡同と呼ばれる北京独特の古い路地がある。四合院と合わせていわゆる老北京を形成するが、市中心部では胡同も観光地化しているところが多く、古き良き北京の面影を感じることが出来る場所は年々少なくなっている。しかしこれは北京に限った話ではなく都市化が進展すると旧市街が減ってしまうのは必然とも言える。今回北京西部の郊外、模式口大街と言う通りにそのような古い家並みが残っているのを見ることができた。地面に着いてしまいそうなほど長くたわんだ葱を手押し車に何十本と乗せて引く初老の女性、寒空の下おしゃべりや象棋に興じる老年男性達。ボロボロの塀に落ち葉が積もった地面。まるでその瞬間今ではない中国にいるような気がして、不思議な感覚に襲われる。その静かな様子に飲み込まれてしまう。これが老北京というものなのだろうか。



人民大学の学食。安価で種類も豊富。



都市化が進んだ街の様子。多くの車が行き交う。



観光地化した胡同。平日も多くの人で賑わう。

そうした古き良き北京が僅かながらに残る一方で、中国ではテクノロジーの発展と応用も目覚ましい。今の中国人は新しいものをとりあえず試してみる傾向があるように感じる。言わずと知れたシェアバイク、電子マネー決済。外国人でも使える方法を事前に調べ、使ってみたが確かに使い勝手が良い。わざわざ小銭を探して払う必要もなく、バーコードを読み取ってももの数秒で会計は終わる。むしろ現金を使おうとすると嫌な顔をされ、お釣りが無いと言われ使わせてくれないことも多い。現金のみ可のお店が多い日本とは対照的である。個人間のお金のやりとりもボタン一つで行われる。これは今後も中国においてキャッシュレス化を進展させ続けると同時にお金というものの考え方、捉え方もいずれ変えてしまうであろう。シェアバイクも数年前に爆発的に普及した。広い北京では自動車を持つていなければとても便利である。最近ではその利用率が下がっており、事業は失敗とも言われている。しかしこの単発的で短期間の取り組みは中国の企業精神を表している。日本では利益が確実に見込めない事業は当初からボツになる傾向がある。それとは対照的に中国ではとりあえず試して利益を考えるのは後、というわけである。一方で愛慕公司では利益よりも社会貢献を重視している。中国の女性用の下着シェアの大半を占める同企業は同公益基金会を通じて積極的に社会貢献に取り組み、その名にもある愛的精神を広めることを優先することで返って企業イメージを上げること成功している。また科学技術、文化をそのデザインに取り込みつつ美を追求しているというが、そこには常に消費者の快適さという視点があるところにも注目すべきである。中国産の製品は粗悪というイメージが植え付けられていたが、これはそれぞれどこか人間自然科学美を調和させて



洒落た本屋。店内にはジムやカフェもある。

いる観点からして時代の最先端をいつているとも言えるのではないか。もちろん全ての企業がこの様だとは言わない。しかし愛慕はこうしたスタンスをブランド創立から二五年、常に守ってきたのである。また、私には深圳で起業をした友人がいるが、彼もまた新しいアイデアで、顧客自らがデザインする商品を提供し成功している。中国では経済の成長とともにこうして消費者の求める質が上がっているだけでなく企業側がそれに答える様になってきている。

最先端テク
ノロジーの対
極にある中国
全体としての
伝統文化はど
の様になって
きているのだ
ろうか。これ
を一概に論じ
るのは難し
い。先の文化
大革命で伝統
文化は破壊さ
れつくしたと
聞く。本当に
全て破壊され
てしまったと
いうのだろうか

か。映画『活着』では影絵芝居師の主人公は典型的四旧(旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣)だとして影絵人形を燃やせと言われる場面がある。古ければ古いほど反動的と見なされた。これがどの範囲まで及んだのかは定かではない。しかし今回の研修ではそのような想定とは異なるものを体験することができた。その一つが昆曲である。台詞は全くもって聞き取ることができなかったが、京劇よりも古い、およそ四〇〇年の歴史を持つその伝統芸能の美しさに見入ってしまった。一時期は衰退を見せその座を京劇に譲った昆曲であるが、現在では若者を含め再び人気が上がっている。これは昆曲が伝統文化を伝えるという役割を果たすと同時に時代の流れに合わせて改革を続けているからだという。二〇〇一年には世界無形文化遺産にも登録された。ところで先述した胡同の減少に示されるように、その生活に根付いた伝統文化は老北京とともに失われていってしまうのか、と言うと必ずしもそうとは言えない。昆曲のみならず、お茶や中秋節、春節、中国武術等も伝統文化と言え、中国では生活そのものにその多くが根付いており、生活の変化と共に変化してきたもの、変化せずに廃れていったものもあるだろう。物質的に豊かになった今、中国は精神的な豊かさを求め、衰退した伝統文化の再起を図っているようにも感じる。

この欲求は伝統文化を超え、もっと日常的な飲食店や娯楽にも及んでいる。都市部ではおしゃれなカフェや書店が増えつつある。若者の間では日本のアニメや漫画、映画も流行し、SNS上でも日本の情報が行き交う。インターネットの普及により我々の知らぬところで日本のポップカルチャーの受容が進んでいる。ある意味、日本をモデルとして精神的な豊かさを模索してきたと言えるだろう。



天壇公園で朝から集まって遊技に興じる地元の人々。



北京郊外。落ち葉が積もり、寂しい雰囲気醸し出す旧市街。

うか。大昔に日本が中国から儒教などを受容し、日本からは多くの留学者が中国へ向かったのと似た構図である。しかし現代では中国から日本へと文化が輸入されることはあまりない。なぜこのようなことが起こるのだろうか。一方的な歩み寄りとは他方の傲慢さに繋がりがかねない。

思えば、私は日本ですら伝統芸能に親しんだ覚えがない。その他文化歴史すら曖昧な部分が多い。自国を理解するということは実は難しい。自国を理解せずして他者理解という場面に直面したとき、そこに何があるだろうか。中国はかつて日本が歩んだ道と同じ道をより短い時間で歩み、そして追い抜いてしまった。日本もかつてバブル経済に溺れ、海外で散々豪遊し、様々な公害問題も引き起こした。中国も経済発展と共に富裕層が増え、日本で爆買いをし、食品安全管理や大気汚染などに直面した。そしてこれから中国も日本同様高齢化に悩まされる。今年は一九七八年の改革開放から四〇周年、日本の中国に対するODAも今年度で打ち切りとなった。わずか数百年前まで中国から学ぶ立場であった日本は教える立場となり、それから競争する立場へ、一〇月に行われた日中首脳会談では天安門広場に日本の国旗が掲げられ、競争から協調へと再び潮流が変わった。政治的相互信頼の醸成の他、経済、国民交流の促進も約束された。現行の中国政府の内政には少数民族問題等多少なりとも強引なところがあるのは否めない。伝統文化の復興も習近平総書記の目指す中華民族の偉大な復興の準備段階とも考えられる。だがそれを第三者の立場から論じることもまた難しい。しかし、ここで紹介したように実際に自らの目で、肌で、さらには全身で未知なる存在に向き合うことは新たな興味・好奇心をもたらすとともに濁りのない実態を知る重要な手段となりうる。その時、開かれた可能性を心に持ち、自分をいかに保ちながらそれに向き合っていくかが今後の二国関係において重要になってくるであろう。互いに学ぶべきことは多いはずである。電子マネーは中国の技術や経験が日本にも更なる普及をもたらす一助となるであろうし、高齢化で先行する日本の医療・介護

サービスのノウハウは中国側で今後必要とされてくるであろう。中国の企業精神はリスクを避ける日本企業にヒントを与え、停滞する経済の足掛かりとなるかもしれない。

歴史認識に関しては双方が寛容にならなければ何も産まない。その為には人と人の精神交流が重要である。観光業の拡大もその一つであるし、次代を担う青少年の交流も不可欠である。事実、今後五年で三万人の青少年交流が首脳会談で合意された。この時互いに先ず自国の文化を理解し、それから相手の文化を体験すること、日中友好はそのような相互理解の元に進められるべきであるし、それが為されたのであれば、かつての東アジア全体で共有する郷愁の元、日中友好は一带一路において世界秩序に大きく貢献するであろう。

開かれた心

日中首脳会談が行われた直後の北京訪問、とても意味のあるものであったと思う。その一方で多くの反省点があった。観光としての要素はほぼ無く、みっちり詰まったスケジュールのもと、交流・議論は全て中国語と、自分にとっては厳しいものであった。不勉強なため、相手の話を聞き取るどころか質問すら手こずってしまい、異文化理解の第一歩としての外国語学習に対する態度を今一度見直すべきだと強く感じた。また、観光などでは何度も来ている中国であるが、こうした研修を通して見る中国はやはり違った視点を提供してくれることにも気づかされた。新しい中国と古い中国が交差し、同時に存在している、そんな印象であった。

一番印象に残っている交流活動は人民中国雑誌社への訪問である。編集長の王众一さんは私が一度訪れたことのある中国東北地方瀋陽の出身で、東北人らしく大柄で大らかな雰囲気を持ち流暢な日本語を話した。彼は両国の相互理解を促進したいという意思の元、長年「人民中国」の変化、成長を支え、現在では総編集長を務めている。同誌は外国人向けの、諸外国語で執筆される中国紹介雑誌であるが、雑誌刊行当初からそうであったわけではなく当初は政治評論誌であったというように、時代と共にその性格は変化してきた。彼は日本映画の大ファンで、日本文化にもかなり精通していた。同じく中国映画好きで、中国文化理解、両国相互理解に携わることを望むものとして彼の話からは学ぶものが多かった。自分が草の根的交流活動で、或いは周囲のものに異文化理解を促す時にどのようにすればいいのか、ヒントをくださった。「今の若者の問題は可能性が一つしかないと思っている」ということであった。ある一つの前提をあらかじめ持って物事に向き合った時、必然的にその他いくらでもありうる可能性は最初から排除されてしまう。それを防ぐには物事を一つの側面のみから見ることをやめ、開いた心を持つことが必要である。この研修はその意味で様々な側面から北京、中国を再考させるように組まれており、まさにその手法を学んだように感じる。

帰りの飛行機で私は映画を見ていたが、一つ見終わることなく羽田に着いてしまった。こんなにも近いのにどうして我々両国の精神的なつながりが薄いのであろうか。おかしな話である。映画といえば、それを見ることは相互理解の一助となるように思う。これまで様々な中国映画を見てきたが、それは異文化理解を超えて生身の人間という視点を提供してくれる。我々はそこに国や国籍という制約を超えた友好というものを見出すことができるからだ。今後の自らの勉学に資するものであ

ることは紛れもない。

最後にこの度研修をご用意してくださった先生方、ご協力くださった中国側の方々に感謝の意を申し上げたい。これからも中国文化理解を自らの研究として精進していきたいと思う。

(澁谷宗之介)

日中の架け橋

浅野 宏耀

今回の北京研修は筆者にとつて、四度目の訪中であり、二度目の北京訪問であった。思い返せば、以前中国で過ごした時間のほとんどはいわゆる南方であり、それまでに中国語を話すことには慣れてはいたけれど、聞こえてくる訛りは新鮮でどこかそわそわした。これは「外にいる」という感覚であり、まだ、故郷のような慣れ親しんだ感覚はなかった。それまでの北京のイメージといえば大気汚染や、経済発展や、人口集中や、高地価などであった。またそこは、政治の中心でもあり権威の象徴でもあり、政府の統制の力も強いという話を聞いたこともあったので、筆者はどこか近寄りたさを感じていた。それを埋めるには、実際に行つてみて（もちろん、そこにある地を踏むだけでは意味がない）、そこにいる人々や社会と関わってみるしかなかった。

北京大学に通う友人がいたので、北京の様子を度々聞いていたので、今回北京に降り立ったときにはすでに自分なりにイメージはできていた。しかしながら、大抵の場合、想像は現実を描かない。悠久の歴史と数多の人間たちが編み出して言った創造物の結晶である複雑怪奇な都市北京には、筆者の想像などは全く意味をなさなかった。簡単にいえば、百聞は一見に如かずである。行つたことのないところのイメージは想像からしか創り出しえないけれど、それが最大限出来ることであり、最良の手段である以上は、間違つた情報に流されず、偏つた観点に盲目的に従わず、正しい

情報を自分の中で有機的に紐付けて、イメージを組み立てなければいけない。そうしなければ、日中間の誤解は払拭されず、虚像の中にお互いを悪く見続けてしまうだろう。

北京戯曲評論会会長の靳飛氏は、プログラム中のある折にこう言った。

「現在、日中間の人の行き来はもつとも多くなり、交流の頻度や密度は今までに類を見ないほどに高くなっている。その結果、旅行者のマナーや、異文化交流における摩擦が表に現れやすくなっている。」

こういったた、お互いを知るチャンネルの増加が、日中友好を逆に壊してしまうのなら、それは由々しきことである。本来ならば、交流が増えれば単純接触効果によって自然と日中間の好感度は高まるのではないかと筆者は考えるのであるが、どうやらそれは一筋縄では行かないようだ。むしろ、お互いの印象に傷が入りやすくなってきた。そもそも、文化的にも言語的にも政治的にも異なる背景を持つ中国人（というより、中国に背景を持つ人といった方が正確であろうか）と遭遇したとき、日本人はどう対応するだろうか。もちろん日本人を日本人と呼んで一括りにするのは幾分強引ではあるが、文化の違いを恐れずに、異なることを前向きに捉える人はかなり少ないであろう。

さて、この発言について特筆すべきは、靳飛氏の背景である。言葉は発話者の息によって命を宿される。靳飛氏は日中文化交流の促進に長年従事され、尽力されてきた。二〇一七年には、日本外務大臣から表彰され、駐中国日本大使からは「芸術方面における日中友好および文化交流の促進に対して絶大な貢献を残してき

た」という言葉を讀えられている。それを思うと靳飛氏の言葉は筆者の背中に重くのしかかった。日本と中国の間に立ち、日中友好を願ひ活動してきた靳飛氏の言葉には、苦戦したであろう様々な過去を想像させられた。日中友好を願ひ活動していても、社会全体はそう簡単には変わらない。しかしながら、末端から少しでも働きかけていければ、と筆者は思うのである。まずはもちろん、日中両国がお互いを知ることが重要である。知日派中国人というのは、少なくともこのプログラムに参加する前は、筆者にとつていささか遠い存在であるように感じられていた。その一方で、筆者は中国語を学び、同級生に中国に興味のある者は多かったため、知中派と呼べるであろう知り合ひは一定数いた。知日派中国人にあつたことで、中国から日本への友好を知り、筆者個人としてはそれに報ひたいなと感じた。このようにして、知日派中国人と知中派日本人が繋がることで、そこから友好の輪が拡大していくことが、現実的な範囲での日中友好への道であると筆者は考える。

我々東京大学の訪中団は、プログラム中に、人民中国社のオフィスを訪問した。そこで出迎えたのは王衆一氏であつた。王衆一氏も日中友好に長年貢献し続けてきた人物の一人で、人民中国という国外向けに中国の文化を発信する雑誌社で総編集長を務めている。その雑誌は、日本向けにも長い間情報を提供し、歴史の中で、日中関係が冷え込んだ時も日中関係を暖めるために日本国内では入手しづらいような中国の情報を提供し続けた。王衆一氏は日本語を学び、流暢に日本語を話し、日本文化に対しても格別の関心を持っているようで、平たくいうと、通なのであつた。これだけ日本を愛して、国境を跨ぎ、日中の友好を繋ごうとしている人が居るのかと感動した。また、王衆一氏の言葉の中で、最も

印象的であつたのは、もつと若者に中国に対して関心を持つて欲しいということであつた。これからの外交をつなぎ、社会の中で中心的な役割を果たしていく世代が日中友好に対して前向きでなければ、日中友好の架け橋は太くなってゆかない。日本の一人の若者としてこれを肝に命じて生きていきたい。

知日派として活動している中国人の存在をたくさん見ることができたのは、収穫であつた。これらの、知日派中国人であり、中国において日中友好に貢献している人々の重鎮にあつたのは初めてであつた。しかしながら、日本ではこういった人々の存在はあまり一般には知られておらず、巷にはびこる中国のイメージはネガティブなものばかりだ。

また、海外に行つた際、異文化出身の人と交流した際、外国語を使った際に、いつも必ず感じるのが、「うまく繋がれていない」と言つた感覚や、「自分はコミュニケーション能力も語学力もまだまだ力不足だ」と言つた感覚だ。さあ、これはどう克服したら良いのだろうか。ここでは、以下の体験を取り上げたい。今回のプログラムでは、文化体験や企業訪問でいくつかディスカッションの機会を設けていただいた。ここでは、もちろん様々な言葉の壁があつたが、我々が外国人（というより、中国語を外国語として話す者くらいの意味）であることを気遣い、わかりやすくコミュニケーションをとってくれたので助けられた。それでも、やはり付け焼き刃の中国語では、母語である日本語のようにうまくコミュニケーションはできず、辛酸を嘗めた。しかしそんなときに、自分の心の中に壁を構築してしまうのはよくない。友人は、完璧を目指す必要はないよ、と筆者に語りかけ、慰めました。そこで、その言葉に賛同した筆者は生きる力を取り戻した。言葉が

通じ合うことで、友好は深まるに違いないと筆者は信じてやまないが、コミュニケーションを取ることを恐れるあまり、言葉を使わずに深く通じ合うことをやめてしまう人をたくさんみてきた。自分もそのうちのひとつであるし、このプログラムにおける経験も例外ではない。心のなかで、抵抗を持って、恐れてしまったらそこから連鎖して有効はすり減っていくのだ。これはとても難かしいことではあるが、各人が、異文化交流に対して、自信を持って、相手を遠ざけずに臨むことが重要である。それを実践して初めて日中交流や友好は促進されるし、お互いのイメージもよく変わるはずだ。我々は、自信を持って、付き合ってみるといふ姿勢を持ち続けなければならない。



くもり、ときどき北京

北京を訪れるのは2回目でした。1度目は昨年3月に1人で、のらりくらりと寂しく旅行しました。そのときは、中国語をしゃべりたいと思い、春休みを丸ごと中国で過ごしたのですが、中国語の上達はいまいちでした。それでも、それから機会さえあれば中国に行って、中国とのつながりを密にしたいと日ごろから考えており、今回のプログラムに参加しました。

人民大学の学生との交流では、先方の学生たちに本当にお世話になりました。キャンパス案内や、博物館見物ではいろんなことを話してくれ、また、私がつたない中国語で話をすると優しくいろいろ教えてくれたり、議論したりしました。それから、嬉しかったことは、人民大学との交流以外にも、一緒に参加した東大生の現地の知人たちが何度かに分けて遊びに来てくれ、仲良くなることができたことでした。また、彼らは遊びに連れ出してくれ、その際に中国の学生たちや中国に留学している学生たちは私たちにとても親切にしてくれ、素敵なプレゼントもいくつかいただきました。

食事に関しては、いろいろな地方の食を味わうためにと、プログラムの方々に毎日中国各地のレストランに連れて行っていただきました。正直言うと苦手なものも多かったのですが、中国料理にもいろいろあるんだなと舌で実体験しました。そして、毎日のようにでてくる北京ダックにはたいそう太らされました。

また、文化体験や企業訪問でいくつかディスカッションの機会を設けていただきました。そこでは、いろんな質問ができましたが、やはり中国語を使っていたために困難は多く、意味不明な時も多かったです。そんなときにはいつも決まって無力感を感じるのですが、友人が完璧を目指す必要はないよと言ってくれたので冷静になれました。

22歳という多感な年頃に嵐のように北京を巡り、見て聞いて話して匂って触って感じて、北京の空気で自分の心の風船を膨らませて、価値観を見直して、心を揺さぶる経験は人生の中で価値あるものです。きっとこれからの人生の歩き方を示してくれる道しるべとなることでしょう。素敵な機会を与えてくれた方々、プログラムの運営をしてくださった方々、プログラムに関わった全ての皆さんに感謝します。

(浅野宏耀)

日中交流活発化の功罪

小山 摩莉子

一、はじめに

日本と中国は、一九七八年の国交正常化以降、徐々に両国間の交流量を増加させてきた。領土紛争や歴史問題をめぐる対立の激化による影響はあったものの、二〇一七年には中国の年間訪日客数は七〇〇万人を超え、両国間の人の往来はかつてないほど盛んになっている。日中間の人の往来の増加は、両国間の相互理解を助け、国民感情の改善に寄与する効果が期待されている一方で、文化や習慣の違いを浮き彫りにし、両国間に摩擦をもたらす懸念も指摘されている。

そこで本稿では、中国から日本への入国者の増加によって日中の国民感情にどのような変化が生じるかを、正負の両側面から考察する。

論は以下の順序で進める。まず、近年の中国人観光客の急増が、実際に両国の国民感情に与えたプラスの影響を、言論NPOによる「日中共同世論調査」の調査結果を用いて考察する。ここでは、訪日客の増加に伴って、訪日経験のある中国人はそうでない人に比べ日本へ好印象を持っている人が顕著に増加しており、一方の日本人側も「中国人の増加によって中国の存在が身近になったこと」が中国へ好印象を持つ最大の理由の一つとして挙げられており、訪日客の増加が両国の国民感情の改善に寄与していると論じる。



「(今後予想される)更なる来日中国人客の増加は、両国間に摩擦を引き起こすだろう。その対策を今から考えなければならない。」と繰り返し仰っていた新飛先生。

次に、来日する中国人客の増加が日中間にもたらす摩擦を考察する。まず、近年の訪日中国人観光客の増加によって日本人との間で生じている摩擦を、新聞記事を用いて考察する。次に、日本へ定住する中国人の増加によって両国間に生じると考えられる摩擦を考察する。政府が今議論の俎上へ上げている出入国管理法が実際に改正されれば、中国からは、観光客だけでなく、日本へ一定の期間定住する人も大幅に増加すると想定される。その場合、どのような摩擦やトラブルが生じうるかを、日本の外国人集住地域で実際に起きているトラブルを例に取り、考察する。ここでは、外国人と日本人住民との間のコミュニケーション不足が両者の敵対感情を生み、トラブルにつながっていることを述べる。さらに、こうした摩擦の解決に有効な示唆を与える事例として、日本人住民と移民との共生に積極的に取り組む川口市の先進的な取り組みを紹介する。

最後に、これまでの議論を踏まえ、将来に渡る良好な日中関係の醸成に何が必要か、筆者なりの結論を提示し、論を締めくくる。

二、訪日客の増加がもたらすメリット

まず、近年の中国人観光客の急増したことが、実際に両国の国民感情にどのような変化をもたらしているかを考察する。ここでは、日本の言論NPOと中国の中国国際出版集団が日中の両国民を対象とした共同世論調査の結果を用いる。この調査は、日中両国民の相互理解・相互認識の状況やその変化を継続的に把握することを目的に、二〇〇五年以降毎年行われている調査である。

二〇一七年に行われた、「日中共同世論調査」の結果による

と、「相手国に対する印象」という項目では、日本側は中国に対して、「悪い印象を持っている」とどちらかといえば悪い印象を持っている」は調査を開始した二〇〇五年以降二〇一四年までほぼ一貫して上昇を続けており、近年は低下傾向にあるものの依然八割台にある。一方の中国は、尖閣諸島をめぐる紛争が顕在化した二〇一二年に、日本に対して「悪い印象を持っている」とどちらかといえば悪い印象を持っている」を選んだ回答者が急上昇するなど、日本に対する印象は時事情勢に大きく左右されていることが読み取れる。これらの回答から、訪日中国人客は二〇〇五年以降毎年一貫して上昇しているにもかかわらずⁱⁱ、それに比例する形で両国の国民感情が改善しているわけではないことが分かる。

しかしその一方で、「相手国に対する印象の理由」について、日本人が中国に「良い」印象を持つ理由で最も多いのは、「観光客の増加や民間交流により中国人の存在が身近になっていくから」が、四七・八%で最も多く、中国人では、「日本人は礼儀があり、マナーを重んじ民意が高い」が六一・八%（昨年は五二・九%）で最も多く六割を超えている。また、日本に渡航経験がある中国人に絞ると、日本に「良い」印象を持つ人は五九・八%と六割近くにあり、渡航経験のない人の二六・二%を大きく上回るという調査結果も示されているⁱⁱⁱ。これらの結果より、訪日中国人客の増加が実際に両国の国民感情の改善に寄与していると言えるだろう。

三、訪日客の増加に伴うデメリット

① 観光客の増加に伴う摩擦

訪日中国人客の増加が両国の国民感情の改善に有効であること

は上述の通りである。しかしその一方で、上述の調査結果には表れていない、訪日中国人客の増加による摩擦が生じていることも事実だ。例えば、二〇一八年八月二五日の日本経済新聞は、観光客の増加で住民への悪影響が生じることを指す「観光公害」について取り上げている。この記事では一例として、鎌倉市の江ノ島電鉄鎌倉高校駅付近の踏切が、漫画「スラムダンク」に登場する踏切のモデルとされていることで中国人観光客が殺到しており、数々の対策を講じている今なお、近所の住民の生活に悪影響があることが指摘されている^v。また、浴室や食堂で大声で会話するなどといった中国人観光客のマナーの悪さも指摘されている^v。

訪日中国人客の増加は概して両国の国民感情の改善に寄与している一方で、マクロなレベルで考察すると、日本人との摩擦も生じている。もちろんこうした「観光公害」は必ずしも中国人観光客に限ったものではないと考えられるが、観光客全体占める中国人の割合が極めて高い以上、こうした「トラブルを引き起こすのはいつも中国人観光客」というレッテルを貼られかねず、中国人へのマイナスイメージを誘発しかねない。こうしたトラブルや摩擦の解消には、日本のマナーや習慣を中国人に対して事前に周知させる、旅行中に日本文化を学ぶ機会を設け日本の嗜みを教える、などといった地道な活動を続けていく必要があるだろう。

②労働者の増加に伴う摩擦

労働力不足が深刻化する中、日本政府は外国人労働力の受け入れ拡大の方針を打ち出した。従前求められてきたほどの高い専門性を有していない外国人労働力にも門戸を開放することで、二〇二五年までに外国人労働力を五〇万人超増やす計画だという

^{vi}。こうした政府の「外国人労働力受け入れ拡大」によって、今後中国から、日本に一定期間居住する労働者の流入も増加するものと予想され、日本人との間に、観光のような短期の滞在では生じることのない摩擦やすれ違いを生む可能性がある。そこで、今後日本における中国人労働者の増加が、両国民の間にどのような摩擦を生む可能性があるか、南米等の日系移住者の集住する地域で起きた実際の事例を取り上げて、考察する。さらに、外国人居住者との共生に先進的な取り組みをしている川口市の例を取り上げ、摩擦解消に有効な方策を探る。

外国人労働者の流入に伴う摩擦には多種多様なものがあるが、とくに文化や宗教の違いに由来する摩擦は概して深刻化しやすい。日中に関しては、宗教や文化的背景が比較的近いことから、欧米諸国のような宗教や文化に由来する摩擦が生じる可能性は低いものの、言葉や国籍の違いから生じるコミュニケーション不足が、中国人と日本人住民との間でトラブルを生む可能性は十分にある。そこで、一九九〇年の改正出入国管理及び難民認定法の制定を契機に日本へ出稼ぎに来た南米の日系人が集住する地域で、南米日系人と日本人住民との間で実際に起きたトラブルを紹介する。

△滋賀県之市の団地での騒音問題のケース。v

ある日本人が、隣人の外国人が夜になると大音量で音楽をかけることを迷惑だと思っていたが、その外国人と顔は合わずことはあっても話したことがなく、日本語が通じるかどうかもわからなかったため、外国人に迷惑であることを直接伝えるのではなく市役所を通じて警告してもらった。市役所の職員を通じて注意を受

けた外国人は、直接申し出ればよいのに市役所を通じて警告されたことで憤慨し、友人と数人で日本人の家を訪ねてこのことに抗議した。突然、数人の外国人の抗議を受けた日本人は、驚いて警察に「外国人に脅されている」と通報してしまった。

このことに対する日本人側の認識と主張は次のようである。

「隣家が近接しているところで音楽を大音量で流せば迷惑であることは分かっているはずなのに、非常識な人間だと思った。」

「非常識な人間に直接苦情を言うのは危険だと思い、市役所から苦情を伝えてもらった。」「急に外国人に自宅に押しかけられたので恐ろしくなつて警察に通報した。」

他方外国人側は次のように主張する。

「自分の流している音楽が不快であれば、不快であることを申し出てくれるはずであり、それを言わないということは不快だと思っていないということである。」

「以前、何度か日本人からの苦情を市役所を通じて警告されており、このことは外国人に対する嫌がらせだと思っていた。今回のことで、それが嫌がらせであるという思いを強めた。」^{vii}

騒音という些細な出来事がなぜ警察沙汰の騒動にまで発展したのか。人間関係論の観点からの分析によると、人は、例えば言葉の問題が原因となつて他の人々との交流が不足すると、結果として強迫的な傾向を強め、コミュニケーション能力が低下し、他の人々との協調も困難になつて、警戒心を強め敵対的な傾向が強いという。つまりこのケースにおいても、交流の不足から相手に対して未知・無知といった状況になり、そのことが不安感をもたらし、警戒的な行動を引き起こすことにつながっていると考え

られる。もし両者の間に健全な交流があれば、日本人が外国人に恐怖を抱くことはなく、外国人に直接注意することが可能であつただろうし、外国人の側も、交流がないがゆえに疎外されていると思ひ込んでおり、この思ひ込みが日本人の市役所への通報を「外国人に対する嫌がらせ」と考える要因になつている。つまり、交流の不足が、双方の思ひ込みを間違つた方向に増幅させて敵対的で対立的な思考をもたらし、些細な出来事を大きなトラブルにまで発展させたのだと分析される^{viii}。

では、こうした摩擦を解消するための、日本人と外国人居住者との交流をどう確保すべきか。

ここで、中国人との共生に成功した事例を一つ紹介する。近年、埼玉県の川口市が、横浜、神戸、長崎の「三代中華街」に次ぐ新しい中華街として発展してきており、中国人向けの物販・サービスが集積し、中国語が公用語として用いられるような場所になつている。中でも中国人が集積している川口市の芝園団地は、約二四五〇世帯のうち二〇一七年には中国人の住民が全体の半分以上を占めており、中国人の住民としての存在感が高まつている。そうした中、川口では増え続ける中国人と以前から暮らす日本人との間でトラブルが頻発していた。かつては、文化の違いや言語の壁から、以前は住民の間の交流は乏しく、ゴミの捨て方や騒音など生活様式の違いからくるトラブルも多かったというが、近年、自治会への中国人住民の参加の呼びかけや、月に一度の頻度で太极拳を学ぶイベントなどといった多文化交流の行事を開催しているほか、川口市に中国人住民の相談に中国語で応じる「国際交流員」を二人置き対応するなど、中国人住民と共生を図る取り組みを徐々に進めており、トラブルも改善傾向にあるという^{ix}。

こうした川口市の取り組みは、今後外国人労働力の増加が見込まれる日本社会において、多文化共生を図る上での先事例となるかもしれない。

四、まとめ

中国人の来日機会の増加は、日本人と中国人の直接の交流機会を増加させ、両者の関係改善に寄与することが期待されている一方で、同時に多くの摩擦を生む可能性もある。人の往来や交流を増加させると同時に、摩擦を解消するための対策も必要だと言えよう。

生じうる摩擦には上の議論で指摘した他にも多種多様なものがあり、解決には多くの時間を要するものと思われるが、共通して言えるのは、日本人と中国人が深く交わる機会・コミュニケーションをとる機会を十分に設け、表面的な理解にとどまらず、深い文化交流、相互理解に努めていくことが解決への一歩に繋がるということだ。文化交流や相互理解と一口に言っても多様なものがあり、理想形をめぐる議論は尽きないが、日中の文化交流に関して言えるのは、単に相手国との文化の相違を認知し理解を深めるという通常のプロセスだけでなく、同時に相手国文化との類似性も見出せるという特殊性を有していることだ。日中間には千年以上にも渡る交流の歴史があり、その中で培われてきた両国文化の類似性は相手国への親近感を醸成する。将来に渡る良好な日中関係の構築には、地道な文化交流活動を通じて、相手国との相違点や類似点を認知し、少しずつ相互理解を深めていくしかないのだろう。

注

- i 言論NPO「第三回日中共同世論調査(二〇一七年)」<http://www.genron-npo.net/pdf/13th.pdf>
二〇一八年一月三日閲覧。
- ii 日本政府観光局(JNTO)「二〇一七年国籍別「目的別訪日客数(確定値)」」https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2017.dtf.pdf 二〇一八年一月三日閲覧。
- iii 言論NPO「プレスリリース」<http://www.genron-npo.net/press/2017/12/np0-13-1.html> 二〇一八年一月三日閲覧。
- iv 『日本経済新聞』二〇一八年八月二十五日夕刊。
- v 「産経ニュース」二〇一四年一月四日 <https://www.sankei.com/premium/news/141016/prm1410160003-n1.html> 二〇一八年一月三日閲覧。
- vi 唐鎌大輔「『外国人労働者の受け入れ拡大』をどう読むか」東洋経済、<https://toyokeizai.net/articles/-/225911> 二〇一八年一月三日閲覧。
- vii 労働政策研究・研修機構「第五章 日本人・外国人住民の摩擦問題の原因と解消・人間関係論の視点から」『労働政策研究報告書』No.14(二〇〇四年) pp.104-105。
<https://www.jil.go.jp/institute/reports/2004/documents/014.pdf> 二〇一八年一月二七日閲覧。
- viii 前掲論文、pp.103-108。
- ix 日経スタイル「池袋・川口…ミニ中華街が続々 共生の一步は太極拳？」
<https://style.nikkei.com/article/DGXMZ032916720S8A710C1905E01?page=2> 二〇一八年一月二七日閲覧。

日中文化の同質性と異質性

今回の北京研修は、私にとって初めて中国語を使って中国について深く学ぶ機会
で、非常に実りのある充実した一週間だった。まずは、このような貴重な機会を設
けて下さった先生方、先輩方に心から感謝している。

さて、今回の研修では、中国の伝統文化に触れる機会が数多くあった。中国の伝
統芸能昆曲の鑑賞、首都博物館への訪問、中国の茶文化に関する講義の聴講、伝統
衣装の試着、などがその例だ。その度に、日本の伝統文化と比較しては両者の相関
性、類似性をしみじみと感じ、両国が相互に影響を与えつつ発展を遂げてきた悠久
の歴史に、思いを馳せた。こうした千年以上にわたる交流の歴史や、その結果育ま
れた両国文化の類似性は、両国の国家間関係が悪化しようとも、国民感情が悪化し
ようとも、揺らぐことのない事実であり、両国民の一体感の醸成・両国間の関係改
善にも一定の寄与があるはずだ。

しかしその一方で、文化の同質性が高いゆえに生じる摩擦もあることに十分な注
意を払う必要がある。例えば、日中はともに漢字文化圏にあるため、相手国の言葉
が分からなくても、コミュニケーションを取ることができ、両国民の相互交流を容
易にしている。しかしその一方で、両国で用いられている漢字には微妙なニュア
ンスの違いがあり、それが大きな衝突につながることもある。日中国交正常化交渉時
の逸話を例にとる。田中角栄が「先の大戦で中国に日本は大変なご迷惑をおかけし
た」と発言したところ、周恩来は激怒し、両国の交渉は一時中断という事態にまで
至ったという。これは「迷惑」という言葉における日中のニュアンスの違いに由来
するもので、日本では承知の通り、「ご迷惑をおかけした」というのは重大な出来
事に対するお詫びの言葉としても使われるが、中国では、ちょっと手を煩わせる
という程度のニュアンスしかなく、先の大戦に対して「迷惑」という言葉選びではあ
まりに軽すぎると判断されたためである。

両国文化が比較的近いことが、相手国国民も自国と同様に振る舞うのだろうとい
う無意識の期待感を醸成しており、そのことが両国の摩擦を大きくする危険性もあ
るように感じる。日中の文化の類似性は高いといえど、それぞれが独自に発展を遂
げてきた以上、相違点も多いことに十分に注意を払う必要がある。とくに、大戦後
の発展には大きな差異がある。西欧諸国をモデルに経済大国を追求してきた日本と、
西欧諸国を反面教師に、独自の政治体制の下、驚異的な経済発展を遂げた中国と
では、当然、現代文化や、社会に根付く習慣、風習には大きな違いが生じる。両国文

化の同質性と異質性を同時に認めつつ交流を深めるという新しい文化交流の在り方が、日中間に求められているように感じる。

(小山摩莉子)

我对中国文化与中日友好的一点思考

小林 真也

我已经在北京度过了大约半年的美好时光，所以对于我来说，北京就像东京那般亲切。中国文化也如此——我曾经好几次参加了以“中日文化交流”为主题的活动，接触过不少体现中国文化的东西。因此，我以为我自己已经很了解北京以及中国和中国文化了。但是，这次的北京之行告诉我，我之前对于中国的了解还只停留在表面。中国在某种意义上对于我来说还是有点“陌生”。之前我所知道的中国文化只是表面的现象而已。我们外国人所能欣赏的文化往往容易如此，但是通过这次的北京之行，我认为“文化”不仅仅是某个集团拥有的生活形态或者娱乐行为，而是在集团中使人们感到对集团的归属感，或者自己身份认同的一种媒体。

研修中的一天，我们得到了与中国对外文化交流协会秘书长时坚东女士交流的宝贵机会，接触到中国对外文化传播工作的现状与看法。那时，我问了她对“中国文化”这个概念有什么样的看法与理解。我这次到北京之前读过在中国共产党第十九次全国代表大会上的报告，其中习近平主席谈到社会主义核心价值体系时，强调了“推动中华优秀传统文化创造性转化、创新性发展”。我认为这一句就是了解中国文化的关键。据我所知，中国有大约五千年的悠久历史，其中有好多次的政权演

变与动乱，现代的我们所享受的中国文化就是顺应时代的改变而不断地变化形成的。并且，中国是个多民族国家，除了汉族之外还有五十多个少数民族，每个民族都有不同的文化或生活形态。因此，我觉得“中华优秀传统文化”的定义是个特别复杂的问题。

时女士的回答非常明确：她指出多样性和包容性就是中国文化的最大特点；由于中国是个非常大的国家，并且有悠久的历史，并不能只指出某一个文化现象而将它说成中国文化。我就再问她：中国文化的可变性固然较大，但是其中一定有永远不会变化的东西。您认为中国文化的核心是什么呢？她回答道：虽然中国文化并不是一个具体的东西，但这些小小的文化因素都能够让中国人想起自己是中国人，结局是实现中国人民的团结与和谐状态。

听完时女士的解释之后，我又有了一个问题：中国的多样性与“中国人”的身份认同，会同时存在于中国人的心理吗？由于中国广大，民族也很多，每个人的身份认同也会由出身的不同而不同。认同感的不同会引起摩擦或对立，如民族主义。实际上，为了促进全国各民族的共同繁荣，中国一直摸索着两者的并存——多样性的保存与社会的稳定。这个问题到现在尚未解决，许许多多的媒体都在报道中国政府对维吾尔族、藏族和蒙古族进行的融和政策的现状，也有一些对其一连串政策的批判。我想问一下时女士她个人针对这个问题的看法和意见，但很遗憾，由于我中文水平和对中国政治的理解都不够，那时我提出的问题得到的回答都只浮在现象的表层而已，没能探讨其背后的更深层面。

关于身份认同的问题我还要进行研究与思考，但是我明确意识到文化与认同感之间一定有着不可割裂的密切关系。在此，我要强调在我们年轻时代接触异文化的重要性。我在中国度过的日子还很短暂，但这些生活经验与接触到的中国文化无疑将在方方面面影响我今后的人生。对于中国人来说我是个外国人，但是中国文化与生活的记忆像日本文化一样铭刻在我的心里，回到日本以后我时常意识到我跟中国之间确实存在的缘分，同时深切感到我跟许多中国朋友的深厚友谊。我亲身体验到的，中国，不知不觉地进入在我的身体里，在东京的人海中偶然听到的中文——以前的我并不会在意的——现在却能使我感到实实在在的亲密感。

我的心里涌出来的这种感觉，其范围并不是限于某个民族或者某个国家的，而是超过这些区分的一种认同感。若是我只从外面观看文化现象的话，这种认同感绝不会出现；这是只有将自己投入在某个社会的同时，与自己已有的知识相对照，反复回味在该社会里经历的酸甜苦辣之后才能获得的。

我从年轻的时候就有机会接触中国，也对于中国产生了特别的感情，这就是我人生中最宝贵的事情之一。国之交在于民相亲，民相亲在于心相通。国家之间有国境之分，民族集团之间也确实存在着身份认同的差异，但人民之间没有任何界限。即使中国与日本之间有政治立场的差距，两国之间人的往来也并不会消失，人与人的精神交流也肯定会继续。只有中日两国人民之间的相互理解与关心，才能推动真正的中日友好。

这次《深思北京》研修项目在我的心里确实建立了了解中

国的坚实基础。对于个人来说，此次的北京之行收获颇丰，但这是我的《深思北京》还没完结。在北京度过的一个星期只是个开头而已；我的知识与语言能力都尚不充分，因此我觉得在北京自己进行的考察也有所不足。回到日本后，我觉得自己对跟中国社会与文化有关的事情更敏感了，每次遇到这些事情我就努力吸收知识与见解，并进行反思。这个意思上，《深思北京》这个项目不会结束，永远让我继续学习与思考。

最后，我对各位老师的关怀和指导深表感谢。饮水不忘开井人——为了中日友好，老师们百忙之中给我们日本年轻的大学生做了这么多工作，这份恩情会永远铭记在心，各位老师的真切话语在我的心里深深地扎下了根。今后我一定继续学习中文与中国社会，热烈期望自己将来能对中日友好做出一些贡献。

「中国語ができる」ということ

今回の北京研修「深思北京」では、「中国語ができる」とはどういうことかを大いに考えさせられた。私はかつて北京大学で過ごしたこともあり、日常生活に関しては中国語のみで問題なく用を済ませることができし、同年代の学生とは相手の配慮にも甘えつつそれなりにコミュニケーションを楽しむこともできる。しかし今回の研修においては、自身の中国語能力の至らなさを毎日のように思い知らされた。その理由について、以下で自身が考えるところを述べる。

今回、北京で私が日々感じていたことは、端的に言えば「自身が思いついたことが言えることと、自身が言うべきことが的確に伝達できることは、全くの別物である」ということである。今回は数多くの座談会の場が提供され、その度に中国側の素晴らしい先生方と議論する機会を得たわけだが、そのことは我々が何を発言してもよいということの意味しない。その方に訊かなくても回答が得られるような質問は控えるべきであるし、疑問が自身の勉強不足に起因するものであるのなら、そのような質問を投げかけることは相手に対する無礼でしかない。また、我々の相手をしてくださる先生方はそれぞれ社会的立場が異なっており、それによって我々が発すべき問いも異なる。

それゆえに、大学で我々が普段受けている授業のような「言いたいことは何を言ってもよい」状況とは全く異なり、「相手方の発言の意図を斟酌し、自身の既存の知識——それが十分にあることは前提である——と照らし合わせて、その上で何を知りたいのかを把握し、それを相手に的確に伝達する」という一連の思考過程を経て初めて、自身が発する言葉に価値が生じるのである。このような思考過程を経ず、思いついたことを安直に口に出すだけでは、真の意味での「中国語による議論」とは言えないであろう。

自身の中国語能力は語彙・思考速度ともに全く不十分であり、上述の思考過程を経た上で問うべき問いを的確に発することができたと感じたことは、一週間の研修期間の中でたったの一度しかない。議論の場を飛び交う中国語は、話の大筋が十分に理解できる程度には聞き取れていたし、その場において何を問うべきなのかも基本的に把握できていたと感じているが、偏に自身の中国語運用能力が及ばず、口を閉ざしてしまったこともあれば、自身の問いを相手方に的確に伝達できなかったこともある。これでは、「中国語ができる」とは言えないであろう。語りたいことをただ語るのみならず、その時々に応じて語るべきことを柔軟に、かつ的確に伝達で

きて初めて、「中国語ができる」と自ら言うことができるのだろう。その域を目指して、今後も一層の精進を重ねていきたいと考えている。

(小林真也)





執筆者一覧（50音順）＊所属は2018年11月現在

浅野 宏耀（あさの こうよう）	教養学部国際日本研究コース4年
磯 尚太郎（いそ しょうたろう）	教養学部アジア日本研究コース4年
大門 かおり（おおかど かおり）	教養学部2年
小林 真也（こばやし しんや）	教養学部アジア・日本研究コース3年
小山 摩莉子（こやま まりこ）	教養学部アジア・日本研究コース4年
澁谷 宗之介（しぶや そうのすけ）	教養学部2年
嶋田 泰之（しまだ やすゆき）	法学部法学総合コース4年
野中 崇遥（のなか たかはる）	教養学部2年
宮関 貴臣（みやぜき たかおみ）	法学部法律プロフェッション・コース4年
毛利 智香（もうり ともか）	教養学部2年

2018 年度上級中国語北京研修——深思北京

協力

中国人民大学文学院
北京戲曲評論学会

引率教員

鄧 芳 グローバルコミュニケーション研究センター TLP 中国語 特任准教授
朱芸綺 教養教育高度化機構 教務補佐員

東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

原 和之 総合文化研究科超域文化科学専攻 教授
伊藤徳也 総合文化研究科超域文化科学専攻 教授
白 佐立 教養教育高度化機構 特任准教授
新田龍希 同 特任助教
朱 芸綺 同 教務補佐員
青井亭菲 同 事務補佐員

東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)

石井 剛 総合文化研究科地域文化研究専攻 教授
阿古智子 総合文科研究科国際社会科学専攻 准教授
鄧 芳 グローバルコミュニケーション研究センター TLP 中国語 特任准教授
李 彦銘 同 特任講師
白 春花 同 特任講師

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金及び東京大学グローバルリーダー育成基金による支援をいただいで実施されました。

深思北京

2018 年度上級中国語北京研修報告集

2019 年 3 月初版印刷

編集 / 装幀 朱芸綺

発行 東京大学リベラルアーツ・プログラム

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5564-7671

URL : <http://www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/tlp/zh/index.html#four>

E-mail : tlpchinese@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真 : by Gao yiding

